



## 八〇周年記念事業とグラウンド

高々同窓会長 小山 長四郎



私事を  
申し上げて  
失礼ですが、

十一月で古希を

越えること六年、今更ながら年を取ったと感慨深いものがあります。もう廃品回収車が回って来てもいいのだがと思う時もありますが、なかなか回って来ませんという訳で、廃品同様の老残の人間の通例として、記憶力も弱まり惰性で生きていく日常であります。ところが今回、翠樹体育会の代表として友松敬三君(六一回)が来訪され、機関誌に八〇周年記念事業・グラウンド改修などについて書けたという命令です。弱ったことと思いましたが、何しろ記憶力、わけても年月日については記憶が薄く、夢のように茫々たる有様で自信がありません。お断りしようと思いましたが、それも失礼。老いては若い人に従えて、一応の義務だけは果そうとペンを執った訳です。記念事業の立案計画や詳細な会議経過については学校

当局から発表されましようから、老人の頭脳に印象付けられた感想など二つ三つ申し上げてみたいと思います。

今、手元にある高々同窓会の「会員名簿」一九六七年版を見ましたら、会員名簿刊行の計画は、昭和四十二年秋の創立七〇周年記念行事の一環として現在のよいうな形式で広く一般に配布することになったらしいです。もちろん以前から同窓会名簿は発行されていたのですが、より完全な形で会員諸兄の便益のため提供したいという念願から発したのでしょう。

この会員名簿を手にした時、高々の沿革史はもちろん、過去長年月の間勤務された先生方の消息も判明して懐かしく、起居を共にした同期生はいうまでもなく上級生・下級生諸君の思い出まで夏空に湧く積乱雲に似て盛り上がり、若き日の思い出は尽きません。高々と自己とをつなぎ、同時に級友につながる縁の糸の役目を果すものが「会員名簿」であり、我々個人にとっても大切にすべき史料である

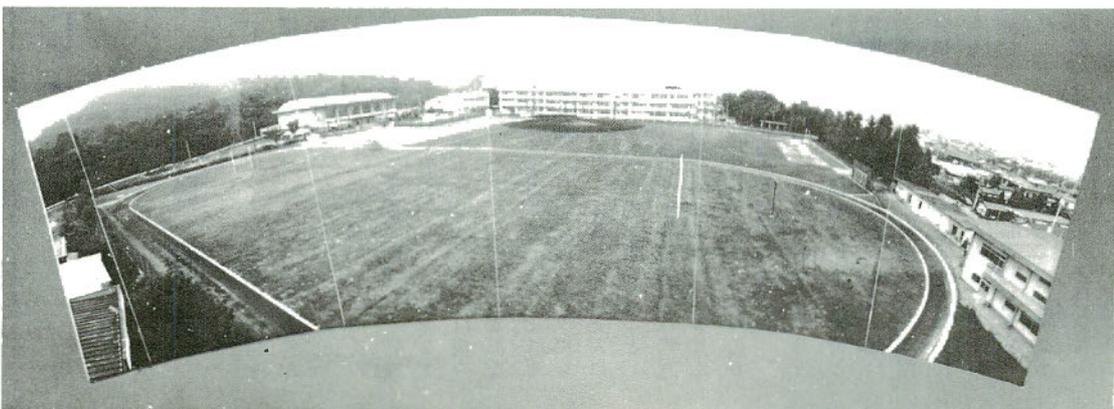
グラウンド  
改修  
記念特集

と想います。

さて、昭和二十九年同窓会長になられ三十九年に辞任された真木武次先生(一五回)の後を受けて、はからずも私は会長に就任致し四十二年に創立七〇周年記念式や記念事業を同窓会員諸兄の物心両面にわたる御援助と御指導の下に行いました。

その際は、体育館兼講堂や理科教室建設費に対する賛助費と申しますか、同窓会として皆様より相当額の寄附金を心配して頂いたのです。そのうち、プール浄化装置や渡廊下、それに水洗便所と設備改善にお手伝いをしました。記念事業に便所改築とはどんなものかと提案に対して多少疑義があったのですが、当時の高崎女子高校の剣持校長が、「高々の便所は男性ホルモンの臭でぶんぶんたるものだ」というような意味の言葉を洩らされたのを聞いていたので、剣持校長といえば、歯に衣着せないで遠慮なく申す直情径行の先生として有名でした。そんなことで水洗式に改めた訳ではないですが、衛生的に良いことは実行に移すべきだと思見一致しての決定でした。さて、こんな尾籠な話を披露して恐縮なんです、今回の八〇周年記念事業で何をやるかの事業選定に当ってこれとほぼ近いような話があったのです。

昭和四十九年の夏の初め頃でしたか、八〇周年記念事業の第一回常任理事会があり、学校当局より計画私案が提出されました。既に第一期校舎新築工事は開始



新装成ったグラウンド  
(S五二・一二)

され、二期・三期と分けて五十二年秋頃までは完成の予定とのこと。それに合せて記念式典は挙行されべきだとしても、八〇周年ですから何か後世に記念になるよう七種類程の事業計画案が準備されました。学校当局が頭脳を搾り練りに練った案だけに、甲乙を付け難いのです。

その時、浜名一雄氏(二一回)が、提案の第一件であるグラウンドの整備を提唱されたのです。浜名氏は、永年県会議員をし、県体育協会長をされ体育には熱心で、県会議長の時だったでしょうが、ヨーロッパに行かれてイギリスの学校を視察。その折、あちらの学園、わけてもグラウンドの整備されて立派さに感服されて帰朝されたそうです。氏は、翠樹学園の窓越しに周辺に雑草が茂りてこぼこに荒れたグラウンドを眺めながら、先輩として後輩のため贈りたいのは整備・整頓された学園であり、わけてもグラウンドの整備の必要を力説されました。夏の夕立で水が校庭に溢れ選手たちがはだしでバケツで水をくみ出すというのが、高々のグラウンドに見られる風景だそうです。市川清氏(二五回)から苦勞話が披露され、選手・生徒たちの苦勞が競技の練磨と共に競技場の準備にまで及んでは技術の上達も期待出来ない。選手・生徒がかわいそうと話されては、理事一同も成程と同意せざるを得なかったのです。

知育も大切だ。しかし体育——これが青少年期の情操教育に大きな役割を果たしていることは見逃すことの出来ない事実で、身体の育成と共に意志や精神の発達に寄与することは計り知れないものがある

として、井上房一郎氏(一五回)のバラ園が話題になったり、会議は熱気を帯びて進行したのです。その間に、野球や蹴球、それに清水善造氏(七回)の話が出たりして、いわゆる「名門校」高々はスポーツでも名門校になることが望ましいと結論されました。第三者的立場からして記念事業にグラウンド造成とは……と首をかしげる批評が後日談としてないではなかったけれども、これは七〇年記念事業で水洗設備をやったことは同一に談ずることは出来ないかもしれないが、学園として学園に相応しい環境を整備して後輩に贈呈する先輩の行動は限り無く優しい心根の現れとして賢察してもらったのです。その後、この件で出県し山川教育長に陳情の節、教育長も官のやるべきことを民間が進んでやってくれた……と暖い理解を示してくれたのでした。

私は学園とは、校舎だけのものではなく、多くの施設が整備されて「学園」という名に相応しい環境造成が必要であるといいたいです。このためには、地域住民の関心が集まらなければ学園は名のみで荒廃して行くのではないでしょう。そのためのものとして同窓会が存在するのではないですか。高々卒業の中堅の諸君が集って翠樹体育会を結成し、母校のため在校生のためにスポーツ面で振興策を考え、その向上発達に寄与したい熱意を抱いておられます。記念事業としてのグラウンド造成、そして今後の維持と整備が、これら有力な会員の結集力で実現するよう期待致します。

(一八回・美峰酒類KK会長)

## 伝統に感謝して



高々PTA会長

安藤直典

先般の高校野球県大会のこと。

高々チームの奮戦振りをテレビで観戦していた所、応援席に翻翻と翻る大応援旗が鮮やかに画面に映し出されました。長い歴史と伝統を背にして必死に戦い続けた多くの先輩たちの激励と叱咤がこの旗に籠っている様に思え、また現役たちもその伝統に恥じず悔いのない健闘をしていたのも印象深いものがありました。

高々生活の中で特に懐かしいものは自らの汗を流した部活動であり、その汗に綴られて高々八〇年の間数多くのOBが各部に生れましたが、

その中でも運動各部のOBが結集して作った翠樹体育会は誠に強力であり、運動各部全般に愛情と激励を注いでいてくれます。生徒父兄の一人として、自分の子弟の高々在学中に受ける先生方の薫陶と並んで、この強力なOB陣より部活動を通じて受ける愛情と激励は高々生活での大きな収穫の一つであらうと思います。高々のごとく歴史の長いだけにOB層は厚くその得るものがより大きい

であらうだけに、子弟の高々に籍を置くことの喜びはまた一入のものがあります。

この度、創立八〇周年を迎えての記念事業には、学校・同窓会の皆様方の御苦労の成果として、立派なグラウンドが竣工致しました。以後の現役たちは、どんなにかこの立派なグラウンドの恩恵を受けることでしょう。この使いたい立派なグラウンドを造るに当り、体育会の皆さんにも一方ならぬ御協力を頂いたこと、またその御協力を通じての現役に対する愛情を感じずにはいられません。現役生徒の父兄として心から御礼申し上げる次第です。

八〇年の伝統の縦の糸をつなぐ皆さんOBたちの後輩に対する愛情と激励は今後も注いで頂くことと思いますが、その統合した場である体育会におかれましても国峰善次郎会長(五〇回)以下皆さんのお力をお借り充実したものであり、また高々運動部の名を更に高らしめる様、益々の御尽力・御指導の程をお願い申し上げます。(四五回・安藤KK専務)

# グラウンド改修を終えて



学 校 長

中 野 敏 宗

創立八〇周年を迎えまして、いよいよ懸案のグラウンド改修工事が完了しました。既に野球・テニス・陸上競技の練習には使用して来ましたが、九月に入り、芝生の根付きも良くなりましたので、ラグビー・サッカーの使用が許されて全面的に開放される事になりました。緑の芝生に覆われて整然と配置された競技場を一望します時、これがグラウンドというものかと今更のごとく感じられ、そこで伸び伸びと走り回る生徒たちの姿を眺めます時、やはり不安と苦労はあったがこの仕事を手懸けて良かったという実感が湧いて来ます。

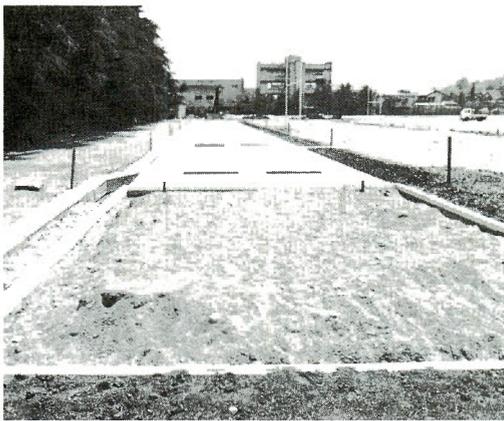
顧みますと、改修事業が決定されたのは昭和四十九年六月でした。同窓会・PTA合同役員会で、八〇周年記念事業の主要事業として取り上げられましたが、浜名一雄大先輩(二一回)より「校舎も全面改築されると聞か、英国のペパリック・スクールでは校舎より立派なグラウンドを持つ事を誇りとしている。グラウンドこそ学校の生命である」との強力な発言があり、全員の賛成で可決されました。それにしても、これに必要な一億

円に及ぶ資金が果して集められるのであろうかと大きな不安もありました。しかしその後三年間にして、地元の同窓生はもとより遠隔の地からも続々と御厚志が寄せられ、ほぼ目標額が達成されるようになりました。これも翠樹体育会の皆さんが進んで御協力下さった賜物であり、深く感謝申し上げます。

この度生れましたグラウンドは、県下はもちろん全国高校の中でも誇り得る立派さであります。特に水捌けの良さは格別であります。従来六月から夏にかけては、体育館とグラウンドとの間の側溝が溢れ西南の隅は正に湿原地帯となっていました。今年はそのような心配は全くないばかりか、相当の大雨が続いても一晩晴れば翌日は野球の内野、テニスコート、陸上走路等は使用可能となり、今までのように泥濘で泣かされる事は無くなりました。現在心配されるものといえ、芝生の維持であります。練習のためには踏み付けざるを得ないのでどうしても痛められる結果となりますが、芝刈や除草等の肥培管理には充分に手を尽くしてその保全に努めたいと思います。

ともあれ、多数の同窓生・父兄の御厚情により生れたグラウンドであります。今後は、遺憾なくこれを活用して各運動部の充実振興に努力すると共に、その整備保持にも万全を期したいと思います。よろしく皆さんの御協力をお願いする次第であります。

タータン製の走幅跳・三段跳場新設 (S五二・五)



井上工業株式会社

取締役社長

井上 房一郎 (二五回)

高崎市八島町五  
電話〇二七三(二)五八四一

いすゞ産業株式会社

取締役社長

山 口 正三郎 (三〇回)

渋川市有馬一九四  
電話〇二七九(二)三二七八

高崎白衣大観音 慈眼院

橋 爪 良 恒 (四四回)

高崎市石原町二七一〇一  
電話〇二七三(三)二二六九

上信トラベルセンター

掛 川 秀 雄 (四八回)

高崎市天神町一三〇  
電話〇二七三(六一)二九一九

# グラウンド改修の 完成を祝う



副 会 長 勝 俣 真

昨春秋に起工された創立八〇周年記念事業の一つとしてのグラウンド改修が、学校関係者を始めとして同窓会・PTA各位の熱心な御援助により立派に完成されつつあります。この大事業に、誕生四年目を迎えた翠樹体育会の一員として参加出来ました事を心から喜んでいきます。

着工以来、寒風の吹きすさぶグラウンドに何度となく足を運び、完成を心待ちにしていた私の眼前に、今県下に誇る、いや全国にも自慢出来るグラウンドに、緑の芝生が目映いばかりに広がっております。

思い起すと、昭和二十五年、学制改革のため三年間入学を待たされ、新制高崎高校の第一回入学試験を通して入学した私たちの時代は、グラウンドは現在の半分しかなく、野球・ラグビー・サッカー部など入り乱れひしめき合う様に練習を行っていました。テニスコートに至っては、ブル造成のために敷地を取られ、一面もグラウンドには見当りませんでした。その様な庭球部に入部した私にとつ

ても夢は大きく、当時全盛のバスケット部やラグビー部に負けずに、国体に出場したいという事でした。それにはまずコートがなければと、顧問の渡辺延一先生（現教頭）を先頭に「もっこ」を担いで土を運んだ事も今は楽しい思い出の一つとなつていきます。

この四、五年、OBの一員として若い現役諸君と接する度に、「グラウンドを大切に」と口を酸っぱくして指導していただきます。現役の三年間ホームコートを持ってなかつた私にとっては、この度のグラウンド改修により立派な環境に恵まれた生徒諸君が、いかにこの設備を生かして立派な成績を、そして健全な身体を精神を培つて下さるか、これからの楽しみの一つでもあります。幸い高々では川嶋尚武先生（四九回）を始めとして立派な体育の指導者に恵まれ、今年の県高校総体では初のポイント制で第三位と普通科高校では首位の活躍が見られました。例年の前橋高校との定期戦でも、一般の生徒諸君の活躍は目を見張るものがあると聞き

ます。願わくはこの若い後輩諸君の内から立派なスポーツの指導者が多数生れる事が、昭和五十八年に予定される群馬国体の成果を上げるために是非望まれるものです。

文部省の昭和五十年年度社会体育実態調査によれば、体育施設の総数は約一八万八、〇〇〇カ所、このうち小・中・高校の学校体育施設は約一二万カ所と約三分の一を占めているとの事であります。高々の所在する高崎市は、県内各市に比較して、体育施設の充実度が非常に劣っている事は否定出来ません。スポーツ振興法第十三条では、「国及び地方公共団体は、その設置する学校の教育に支障のない限り、当該学校のスポーツ施設を一般のスポーツのために利用に供するよう努めなければならぬ」と定めてあります。最近、市教育委員会では、市内小中学校の校庭開放という事が実施されつつあります。学校は、単なる建物や施設というより、在校生やOBはもとより、その地域の住民にとつても大切な共有財産であると思ひます。施設の維持・保存・点検等は、施設利用者の愛情なくしては出来ません。

この記念事業で完成されたグラウンドは県の内外に誇るものではありませんが、この施設に果すべき翠樹体育会の役割も無限のものがありません。進学難時代の荒波にもまれながらも今日もまたグラウンドに汗を流す現役諸君と共に、我々OBも、新しい高々の伝統のために力を合せ様ではありませんか。

(五二回・庭球部)

株式会社 丸一陶器

取締役社長

桜井俊夫(四八回)

桐生市本町六一三  
電話〇二七七(四四)八三〇〇

湯浅接骨院 湯浅柔道場

湯浅斉夫(四八回)

高崎市柳川町一八  
電話〇二七三(三三)五八七〇

株式会社 カタノ運動具店

代表取締役

片野恒(四九回)

高崎市巾着屋町二二三  
電話〇二七三(三三)二五五二

三井シャッター工業株式会社

取締役会長

橋爪和夫(四九回)

高崎市中大類町六三七  
電話〇二七三(五二)七六一

特別寄稿



小さな思い出と願い

県体育協会長

浜名 一雄

最近、人前で演説めいたものをぶつたり挨拶したり、原稿用紙に向かって鉛筆をなめたりする事が、とてもおっくうになった。ところが県議生活をしていた頃の二〇年間は、こうした演出が表芸の一つだと心得ていたためか、少しも苦にならなかつた。人間とは、実にわがままな動物であり、こうした性を持っているのかも知れない。皮肉にも最近はこの種の御用命が返って多くなって来た。だから今日も祝辞要員かと愚痴が出たり、また原稿の御用命かなどとがっくりする事になる。

そんな私に、「翠樹体育」に原稿を出せとわざわざ国峰善次郎会長（五〇回）一行が訪ねて来られたのがある初夏の日であった。私は正直の所またいやな御注文だなど内心辟易したが、余り熱心を勧めでもあり私の立場も考えるといやな顔も出来ず、思わずも気軽に引き受けてしまった。また、「翠樹体育」発行の着想と行動力に引き付けられたからにはほかならないのであった。この事は、母校のためにまた在校生のために一つの拠点と交流の場を提供した事であると感じ、賛意

を表したのであった。しかし、このお客様が帰ってからは後悔しきりであった。それから一度は原稿用紙を出してはみたが、一向に手が付かない。一週間程はあのこうのと愚考しても、皆目見込が立たない。そのうちにスポーツ行事が幾つも重なり、それに振り回されていつか忘れてしまった。そんな経過をたどっているうちに、勝俣真副会長（五二回）から改めて日限を切って督促の言付けが来た仕儀となった。

「翠樹」は元々高中運動部の応援歌であり、先輩の村田鎮虎さん（一九回、既に物故）が物したものと聞くが、正に歌詞もメロデーも応援歌と誰しもうなずけるものである。私は、在学中テニスの選手であったが、全く知らず卒業後しばらくしてからようやく歌えるようになったのであった。

この歌を口ずさむ時、私の臉には上和田時代の校舎・校庭が浮んで来る。校舎は三棟程平行してあった。校門を入るとすぐ表玄関、構わず右へ桜並木に沿って進み、柔道場・剣道場を左に巻いて校庭に出ると、真向いに銃器庫と土俵、その

後ろは芝生の一角を隔てて寄宿舎が見える。東の角には講堂があり、花壇を隔てて鉄棒・肋木・砂場・飛下り階段・テニスコート・踏箱等が置いてあった。南の隅にはポプラの原木が二、三本、高中の標識のように亭々とそびえ、そこから垣根に沿って桜の原木が二〇本程植え込まれていた。私が厄介になっていた寄宿舎の裏手も、築山と池、それに並んで桜の植込みがあった。植込みの下草はクローバーの素晴らしい緑の絨緞で、我々はそこへ寝そべって花を見上げ、夏は下陰に涼み、秋冬ともなると枯枝を通して青空を見上げて青春を語り合ったものである。

その頃は残念ながら校歌がなかった。従って、生徒は事あるごとに「翠樹」を歌い続けたようで、当時としてはこの応援歌が実質的に校歌の代用を務めたといえよう。今でもこの歌を懐かしいものとして、多くの校友に親しまれているようである。また現在、高々運動部はいずれの選手たちも、この歌によって励まされ、この歌によって育まれ、この歌によって若き日を謳歌しているのであろう。

この度、この応援歌の生命が更に新たな生命を生み、或いは翠樹会館となり、翠樹体育会となりその機関誌がその名の通り「翠樹体育」として発刊されるに至った事は喜ばしい限りである。こうして見ると、今や「翠樹」の二文字は高々のシンボルとなったといっても過言ではあるまいと思う。創刊号によって翠樹体育会の役員を見ると、第四七回以後卒業の人々ばかりである。このようにこれを組織した人々が人を育てる盛りの年輩である事が素晴らしいと思ひ、またそれが良いのだと思つてゐる。皆さんの御苦労を多とし、心から敬意を表すると共に、その永続と高々の発展と生徒諸君の飛躍とを念願して責を果したいと思ふ。

（二一回・同窓会常任理事）

市川克美税務会計事務所

税理士

市川 克美（五〇回）

高崎市下和田町三一五一八  
電話〇二七三（二三）九七二一

市川酒食品店

代表取締役

市川 喜好（五〇回）

高崎市赤坂町  
電話〇二七三（二二）五〇七五

特別寄稿

上和田時代の  
グラウンドに寄せて

高々同窓会副会長 入沢 武右門



乗附に移転する以前、上和田町にあつた高中グラウンドは、東西に細長く、南北は狭く、およそ野球をやるには不便な形になっていた。

校庭の西北隅にバックネットがありホームベースとなっていたのであるから、レフト側は相当広いのだが、ライト側はホームとファースト間の距離の倍位の位置に桜並木が東西に走りその先は寄宿舎の廃屋であつた。寄宿舎は昭和五年頃取り払われたが、桜並木は古木で中々見事であつたので切り倒すのに忍びなかつたのであるうか依然として残っておつた。レフト側は広いと言っても、ファウルライオンから三m位の所にラインと平行して平家建校舎があり窓には全部金網が張られておつた。従つて、ライトの実践的守備練習は不可能であり、レフトもファウルは全部校舎が処理してくれた訳である。そんな関係で、遠征や大会の時に広いグラウンドに出るととまどつたり気後れしたものも事実であつた。

昭和六年頃、飛田穂洲先生がコーチに來られた事があつた。飛田さんは、長い間の早稲田大学の監督を大下さんに譲られ、朝日新聞に迎えられノンプロ野球の評論家として一世を風靡していた時代である。この人のノックを荒井正一君(三一回)が受けている時、ボールを追つて並木の桜に激突し顔に大きな裂傷を受けて転倒する事件があつた。幸いにして彼は、一生消える事のない傷跡を残してはいるが今なお元気で活躍している。そんな事があつて、飛田さんと学校当局とどんな話合いが行われたのか知らないが、桜並木はその後切り払われたのである。桜並木が切られた事によつてライトの守備位置に日が当る様になつても、元々狭いことから、大飛球や取り損ねたゴロは寄宿舎跡の草むらに入つてしまひ球探しが大変であつた。

球探しと言へば、校庭の西側には兵器庫とバラック建の野球部の部室が並んでおり、その西側は学校の生垣を境に民家であつた。ファースト側のファウルポールは、再三生垣を越して民家まで飛び込む。そんな時生垣をくぐつて球探しに行く訳だが、一軒だけ苦手の親爺のいる家があつた。見付かると、怒鳴られ家敷の中にに入れてくれない。この親爺のいる時は、球探しもそこそこに引き下からざるを得ない。ある時、例の通り球探しに行つたら、親爺がいつもと違つて大変きげんが良く、「硬球は大変高いそうぢやないか」と話し掛け、「実は川に流れて來たのを拾ひ集めたのがあるんだが買つてくれないか」と約二〇個位の古ボールを出して來た。川と言へば、学校の生垣のすぐ外に小さなどぶ川があるがそれも普段は流れていない。ボールを見れば、川に流れて來たものかどうかすぐ分る。自分の屋敷へ飛んで來たボールを、我々に拾わせないでだめたものである。帰つて相談する事にして同僚に伝えると、誰もが異口同音に、そんなボールを買うべきでないと言うのでそれをけつた。あの意地悪の慾深爺さんは、その後ボールをどう処分したか。今でも時々思い出す事がある。

<p>有限会社 小川精麦 取締役社長 小川 米 蔵(五〇回) 安中市 中宿三〇一 電話〇二七三(八二)〇三二九</p>	<p>雲 税務会計事務所 税理士 雲 喜 延(五〇回) 電話〇二七三(六二)二二七一</p>	<p>東部通信工業株式会社 取締役社長 古 関 実(五〇回) 高崎市 大橋町一七八 電話〇二七三(二二)五四七五</p>	<p>有限会社 塩川製作所 代表取締役 塩 川 祐 次(五〇回) 高崎市 高関町四三九 電話〇二七三(三三)八三〇〇</p>
-----------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------

# OB会の活動

その一



## 恩師を囲んで

### 柔道部

石井 清一

昨年十一月下旬、東武飯店（高崎市八島町）において、戦前・戦後の柔道部OB合同の集いを開催しました。約七〇名が集まり、高中時代の田中良三先生（一五回）も高令にもかかわらず元気な姿を見せて下さり、また戦後柔道部が復活してからの約二〇年間で柔道部と共に歩まれた今井孝造先生（現富岡高校）も出席され、それぞれの時代に思いもはせ、和やかな歓談を繰り広げました。その話合の中で、近年本職の柔道はさっぱりで相撲にのみ好成绩を挙げている柔道部現役諸君を鼓舞督励し、全面的にバックアップする事を再認しました。

今年の夏合宿にはOB二〇名程が集まり、現役に稽古をつけるべくOB・現役対抗試合を行いました。まだまだ現役と互格以上の実力を有するOBは多数ありますが、如何せん稽古不足には勝てず、最後はスタミナ切れでやられた様です。現在柔道部OBも他の部と同様に各界で活躍しておりますが、柔道界においても、鈴木元一氏（五三回・県警・六段）が指導部長、桜井弘氏（五六回・桜井接骨院・六段）が普及部長として県柔道連盟の中核となり、若手のリーダーとして

活躍しております。また、若いOBの活躍も目立ちます。筑波大学四年の田淵吉二君（七三回）が茨城県の国体選手（軽中量級）として第三二回青森国体に出場し、順天堂大学一年の吉原成哲君（七五回）が東日本医科歯科大学大会で個人優勝し高々時代相撲で関東を征覇した実力の片鱗を見せました。

次のOB会は、来年正月、盛大に新年会を兼ねて行う予定です。（五七回）

## OB会発足す

### 応援部

下田 茂夫

応援部OB会は、今年一月十五日に第一回総会を開催し正式に発足すると共に翠巒体育会においても現役のために活動し親睦を深めて行く事を決定し、更に七月二十四日第二回総会を開き役員と会則を決めました。役員は、

- |     |            |
|-----|------------|
| 会長  | 下田 茂夫（五〇回） |
| 副会長 | 加藤 進弘（五〇回） |
|     | 東 秀和（五一回）  |
| 会計  | 高野 政博（五六回） |
|     | 深堀 正（五六回）  |
| 監査  | 齋藤 勝美（五七回） |
|     | 横堀 勇夫（五七回） |
| 幹事  | 早川 弘（五七回）  |
|     | 荒木 厚生（六〇回） |

とし、OB会顧問に応援部顧問の角田匡己先生（五三回・国語科）・鈴木武夫先生（五四回・国語科）になっていただく事になりました。

昭和四十九年五月より名簿作成に取り掛りましたが、二十五年応援部結成以来二四年が経過しているので、考えられるあらゆる方法で各年度の部員を調べ、一応一〇六名の名簿をがり版印刷で発行するの六ヵ月を要しました。しかし次に総会という事になると、ほとんど未知の人ばかりなので上手く行くかなという不安が先に立ち、あれこれと思い悩んでいる間に一年が過ぎ、昨年暮に齋藤・早川君に「先輩やりましょう」と発破を掛けられ同志ありと勇氣百倍し役員や会則の決定までこぎ着けました。案ずるより産むが易し」と申しますが、この間色々協力して下さった初対面の会員の方々に深く感謝している次第です。

今後の活動については、現役と接する機会を多くし話合の中から出来る事をしてやろうという方針ですが、通信費だけでも相当な額に達する現在、まずは運営資金を会員諸兄から年会費として拠出していただかねばなりませんので当面はこの仕事を進め御協力をお願いする事が大きな仕事になっていきます。

青春の一時期を同じ目的に情熱を燃やした仲間たちは、「翠巒」を高唱する事で意気投合し、一〇年来の知己の集いのごとく感じます。この会の発展のために微力を尽す心算でおりますので、会員諸兄の御支援をお願いする次第です。

（五〇回）

高崎中央タイヤ工業所

塚 越 不二夫（五〇回）

高崎市片岡町一―二二―一四  
電話〇二七三（三）五六〇六

新日本自動車販売株式会社

取締役社長

中 村 靖（五〇回）

高崎市下小鳥町一―二一九  
電話〇二七三（六）五三〇三

東急観光株式会社

高崎営業所長

萩 原 富士雄（五〇回）

高崎市通町九三―一四  
電話〇二七三（三）三二〇一

宮下耳鼻咽喉科医院

宮 下 賢 次（五〇回）

高崎市井野町一―二五―二  
電話〇二七三（六）七三二五

# OB会の活動

## その二



### 剣友 剣道部

元顧問 網中 正昭

昭和二十七年四月に高々に赴任して二週間位過ぎた頃、二年六組の授業の終りに剣道の話をした。当時、高校では公

式には剣道が出来ない時代で、愛好者は町道場や武徳殿で指導を受けたり練習をしなければならなかった。授業を終え廊下を歩いてみると、一人の生徒が追い掛けてきて「先生、剣道やりましょう」というのである。私も多少とまどったが若さも手伝って、「よし、やろう」と勇気付けられたように答えた。高中時代の古い道具が残っていたので、それらを使って、翌日から運動場や護国神社の境内で練習を始めた。やがて生徒も四、五名になり、毎日楽しく夢中でやった。

その時の生徒が、現在高崎製紙KK営業本部営業第二課長の小林桂一郎氏(五三回)である。当時は紅顔の美少年で、向う気の強い正義感に燃えた若者であった。それ以来彼が中心になり、剣道部を創設しその礎を築き今日に至っている。下級生に対し厳正で、しかも謙虚に指導をし、ために世話をしていた。今日、社会において尊敬を勝ち取ったのは、高々時代に培われた人柄によるものが大きいのではないかと思う。高々剣道部は、終戦

後数年間の空白時代はあったが、こうして二十七年には再出発の産声を上げ、幾多の先輩諸氏が小林氏の意志を受け継いで今日では押しも押されぬ剣道部に成長し、青年期に入り今年で二五周年を迎えた。ここに改めて最高の功労者である小林氏の剣道部創設の労苦に対して深甚の感謝を申し上げたいと思う。

剣友の皆さん、創設二五周年の尊い伝統を素朴に祝おうではありませんか。(県教委高校教育課指導係長)

### はつらつOLD BOY 野球部

若山 享

野球部OB会(会長中川保・五二回)は、各期別に幹事を置き、その都度幹事を開いて、主に技術面の指導を中心とした活動をしている。学校側・後援会と共同で、新入部員の保護者との懇談会、グラウンドでの直接指導、現役との練習試合、外部からのコーチの招聘など。

これらの活動を強力に支援し、特に経済面の支えとなっている高崎地区後援会(小山榎一会長・四二回)・京浜地区後援会(入沢武右門会長・三二回)の存在は心強い。その他、OBの親睦を目的として、OB野球チームとゴルフの球友会がある。

OB野球チーム(幹事川手義昭・六二回)は、前橋高校・高崎商業高校OBチーム等との親善試合を行っている。現役を退いた気楽さか自称名プレーヤーが多く、選手起用が難しい。

ゴルフの球友会(会長松本清志・四九回)は、年数回コンペを催している。メンバーのスイングを見ると、それぞれ現役当時のバッティングフォームそのままなのが面白い。珍プレー・凡プレーの続出、プロ顔負けのロングドライブ等、とにかくやかましく楽しい会である。

#### 高々・前高OB定期戦

恒例の対前高OB戦は十月三十日高々グラウンドで行われたが、年令と練習不足のハンディを感じさせない白熱した好ゲームとなった。ややもすると遊び半分のプレーになりがちだが、さすがは伝統の一戦だけに、両校OBナインの真剣な試合運びは好感が持たれた。両校とも、Aチーム(三五才以上)・Bチーム(三五才未満)の区分けで編成された。

第一試合は、現役時代共に黄金時代を築いた高々細谷崇(五七回)・前高山藤両投手の先発で開始された。高々は初回から積極的な攻撃を展開。二回、田島宏樹(五七回)・佐藤太清(五一回)・境原武雄(五二回)の連続短打で二点。五回に、竹内功(五七回)・本多饒(五七回)・金田年弘(五九回)・島方幸夫(五九回)・高橋努(五五回)・細谷の連打で四点を上げ、試合を決めた。これに対し前高は、中盤小刻みに得点を重ねたが、細谷・若山の継投に反撃を断たれ惜敗した。



高々・前高野球部OB定期戦

第二試合は、高々丸山宏樹(七一回)が、立上がり小平に本塁打を浴びたが、以後要所を締め辛勝した。(五八回)

#### ◇第一試合

前高A	0 0 1	1 1 2	0 0 0
高々A	1 2 0	1 4 2	0 0 X
前山	山藤	原田	
高	細谷・若山	田島・金田	
前	小平 2 (前)		
本多・佐藤・境原・竹内・金田			
合計			10

#### ◇第二試合

前高B	3 0 0	1 1 0	0 0 0
高々B	0 2 4	0 0 0	0 3 X
前	藤岡・船津・新井・栗本		
高	丸山	武藤	
加藤千景(七三回)			
本多			
困	小平・角田(前)		
丸山(高)			
船津・藤岡(前)			
島方昭夫(高・六二回)			
合計			9

高々丸山宏樹(七一回)が、立上がり小平に本塁打を浴びたが、以後要所を締め辛勝した。(五八回)

# 高中バレー部の誕生 バレー部

桜井 俊夫

昭和二十年八月終戦となり、世の中はインフレ・物不足・生活不安と、高中二年の僕にとっては先の分らぬ時代であった。予科練帰りの三年生が白いボールで円陣パスをしていた中にふと入って触れたのが、高中バレー部の生れる切っ掛けになった。

それから同級生と一年生が集まり、コートも出来、顧問も故金井繁次郎先生に決り、毎日ボールに触る様になった。初めはルールも分らず、高市女に練習に行ったり、高商・高工と乱打・試合をしたりして段々とチームらしくなってきた。国体県予選とも知らず試合に参加し、準決勝で高商に敗れた事もあった。当時県下の一般クラブでフェニックスと言うチームがあり、特に神戸商大出身の神田さんのプレーが非常に刺激になり、全員で色々なプレーを出来る様に努力した。

昭和二十三年、東京教育大学の吉田久一郎先生（現高橋・四三回）がコーチに来られ、初めて大学流の激しいトレーニングを受けた。翌日、高々まで通うのに足が痛くて大変だった。吉田先生のコーチで、バレーボールの基本練習やプレーが飲み込め、本格的にバレー部らしくなってきた。昼休・放課後と練習を重ね、暗くなるまで帰途に着いた。東京六大学バレー部のリーグ戦も皆で見学に行き、参考にして練習した。高々三年の秋、初めて新人大会で高商を破り県下優勝した。

当時の九人制のレギュラーは、F―片野恒（四九回）・高橋三郎（四八回）・桜井、H―牧絵孝夫（四九回）・飯野達男（四八回）・掛川秀雄（四八回）、B―柳沢剛（四八回）・中林靖（五〇回）・市川喜好（五〇回）である。

僕の卒業後二年目から高々バレー部の全盛期に入り、第三代織茂広昭主将（五〇回）中心に大活躍をした。しかし、国体県予選の決勝で高商に敗れた。それまでの全試合は優勝して来ただけに残念であった。

バレーを通じて良かった事は、体力造り、人の和、熱情、努力が出来た事であり、実社会に出てからの活動の基礎になった。昭和五十二年五月、高々・高商・高工OB對抗試合に参加して、非常に楽しく懐かしい思いをした。高崎に住む同志に心から御礼申し上げる。（四八回）

## 競技生活の思い出

陸 上 部

横尾 信男

私が陸上競技を始めた切っ掛けは、高々の入学式に友人と二人で登校すると各部の先輩が入部の勧誘をしていました。私は高校に入ったらかスポーツをやろうと思っていました。一緒に友人は体格が良いせいか盛んに誘われますが、私には一向に声がかかりません。校内を見て歩きながら陸上部室の前へ来ると中学の時から顔見知りの先輩に会い、知った人っている所ならと陸上部に入りました。さて入部はしたものの、人並外れて足

が早い訳でもなし、特にこれがやりたいという種目もなしで、一年の前半は大会の度に予選落ちでしたが、秋の西毛大会で槍投にエントリーしてみました。小さい時からボール投げには自信はありましたが、何しろそれまで槍などは投げた事もなく持ち方さえ分りません。先輩も分らず、仕方なく大会当日になって一緒に

出場していた他校の選手に教わりながら競技しましたが、それが思いがけない好記録で二位に入賞してしまい自分でもびっくりしました。それから本格的に槍投に取り組み、二年で大阪、三年で大分と続けてインターハイに出場しました。二年の時は、とてもインターハイに出られるとは思っていませんでしたので、ある意味では気楽でした。二年の時は、春から好調で入賞は無理としても何とか予選ラインは突破して決勝進出は出来そうだと思っていたのですが、自分の不注意により大会直前の練習でヒジを痛め、不本意な成績に終わったのは今でも残念に思っています。

そんな訳でインターハイでは良い成績を残せませんでした。高々時代の競技生活の中で一番印象に残っているのは二年の県選手権大会で、幸運にも大会新記録で優勝する事が出来ました。この年は県内の大会ではほとんど優勝しましたが、やはり大会新記録という事もあってこの時の感激は忘れられません。

この様に入部した頃は何も出来なかつた私を、曲りなりにも優勝の感激を味わえるまでに御指導下さった先生や先輩の方々には改めてお礼申し上げます。また

## コート増設に思う

庭 球 部

塚越 章司

庭球部の永年の念願だったコートが四面増設されたのは、OBとして大変うれしい事である。校庭に主練習場が無かつた運動部として、長い間苦しい思いを味わって来たのも事実であった。これから、諸先生・諸先輩の御苦勞に答えるべく、現役諸君は今まで以上の良い成績を残してもらいたいと思っている。

庭球部の歴史は他の部に引けを取るものではなく、個人戦においては毎年のように県外の大会に選手を派遣しているし、団体戦においても昭和二十二年・二十三年の連続優勝を始め四十二年には関東大会準優勝の戦績も残しているのである。最近でも、個人戦では何とか合格点の成績であるが、団体優勝が、九年間もないのは誠に残念な事である。コート新設を機会に、団体優勝を目指して頑張ってもらいたいと思っている。OBもまた、この目標に向かってチャレンジして行きたいと思っている。

昭和五十八年の国体も群馬県に決定した軟式庭球は高崎市が会場に内定している。高々のコートから有望選手が数多く生れる様に願っておりそれがコート増設に苦勞した人々への最高のプレゼントになるに違いない。（五八回）

柔 道 部

青春の絆 2



柔道部創設期

大井 宏

終戦後姿を消していた柔道部を創設したのは、昭和二十六年四月である。母校は火災によりその大半を焼失し講堂を使って授業をしていた頃だったので、道場などある訳がない。当時私は、同級の勅使川原達君（大蔵省）と町道場で盛んに稽古をした頃で、学校に柔道部を造りたいと真剣に考えその構想を練った。まず一年後輩の中西弘之君（旧姓福永・五二回・県警）をメンバーに加え柔道部創設を学校へ申請したところ、校友会の部としては認められず、柔道クラブとしてその了解を得た。次は道場と指導をして頂く先生を探さねばならない。幸い、指導は湯浅林太郎先生（県体育協合理事）、道場は高崎公園にあった武徳館を借用する事になった。これで高々柔道クラブはいつでも発足出来る訳だ。クラブ員募集は、新入生を対象に行ったところ二〇名余の入部者があり、二・三年生を加え三

〇名程の柔道クラブが誕生した。武徳館での稽古は、湯浅先生によくごかれたし、稽古相手も鉄道公安職員や専売公社の選手がいたので、上達は早く半年位で黒帯を締める部員が数名出る程だった。当時、県内の高校で柔道部があったのは高崎商業・前橋・勢多農林・館林・渋川だけで、公式試合などほとんどなかった。今こうして当時の事を思い出してみると、国体県予選（個人）と国学院大学で行れた高校選抜大会（個人）が記憶に残っているだけだ。

国学院大学での試合には、勅使川原・中西君と私の三名が出場したが、その費用はすべて自費であり多数の部員が出場する事は困難であった。結果は、三名共ブロックの決勝まで勝ち進み、中西君は総合三位に入賞する事が出来た。

私が長い柔道生活の中で印象に残っている試合は、昭和二十六年の国体県予選だ。出場出来るのは高校生一名という厳しいもので、一次予選を勝ち抜いた四名と県柔道連盟推薦一名が二次予選を行ない団体出場者を決定する事になった。勢農中村君・渋高橋本君・館高染谷君・高々大井・県柔連推薦助川君（高商）のリーグ戦は開始された。私は、助川君とは何回も練習していたし試合もしていたので引分、橋本・染谷君に勝ち、二勝一分けで中村君と対戦する事になった。中村君とは、前後三回程試合して一度も勝った事がないので、この試合には是非共勝たねばならなかった。宿敵の中村君は、助川君に敗れて二勝一敗、彼は私に勝たなければもちろん国体出場は出来ない。

その点私は、引分でも二勝二分けて団体出場となる。こんな消極的な考えが試合結果となったのか、時間切れ寸前に大外返しで一本を取られ、団体出場は夢となってしまった。

私の果せなかつた夢を後輩の中西君・相原昌幸君（旧姓真下・五二回・高崎市役所）・矢島道章君（五二回・県警）・鈴木木元一君（五三回・県警）・須藤裕久君（五三回・高崎経済大学）等が一九五〇年立派になし遂げてくれ、高々柔道部第一期黄金時代を築いている。以来二〇年余、柔道部は今井孝造先生（現富岡高校）・江原隆起先生（保健体育科）と良き指導者を得、OBには県柔連の役員として後輩の指導と柔道普及に活動している鈴木君と桜井弘君（五六回・桜井接骨院）の二人がおり、この高々柔道部のコンビが将来県柔連を背負う日の来る事を祈っている。



柔道部創立記念 (S 27・3・22)

最後に、柔道部創設一年後の記念写真があったので御披露する。前列の中央が私、左へ勅使川原君・中西君である。大学教授・航空自衛隊幹部・会社役員等の顔も見られる。当時一八才の私も現在、九才の子供を持つ父親になっているが、今度は地区の少年のために、柔道スポーツ少年団の創設に意欲を燃やしているこの頃である。（五一回）

思い出の柔道部

田村 悟

机上の封書を見るとクラス会の案内状らしい。読んで見ると、高々卒業以来二年も経ったので、こらでクラス会を開催したいが出席を請うと言う趣旨であった。この種の集会はどうも面倒臭いと言う気持が先に立ち欠席しようと考えていた所へ、桜井弘君から電話があり「翠樹体育」に寄稿して欲しいとの事であった。平素疎遠にしている高々が急に向うから近付いて来たと言う感じがしたので、クラス会には参加を申し込み、寄稿はOKしたものの二一年間は少々長い様だ。何か書く手掛りはないかと思つて「翠樹体育」第三号を見ると、「高々運動部県外派遣費年度別一覧表」が掲載されている。昭和三十年八月に全日本高校柔道大会が大分市で行われ、七名が参加している。だれの事でもない、私もその中の一人であった。この年以降を見ると、全国大会へ個人としては参加しているが団体としての実績はない。関係者に聞くと、昭和二十九年以降、高々柔道部が県下第一位にな

ったのはこの年以外には無いと言う事であった。詳しくは分らないが、残念な事である。そこで、この辺の事について、とぎれとぎれになってしまっている思い出を綴って見よう。

私が一年の時の担任は国語の故清野幸雄先生、数学は横山嘉一郎先生、英語は渡辺延一先生（現教頭）であった。佐波郡玉村町と言う農村の中学校でのんびり三年間を送って来た私には、何とも厳しい授業で毎日が息詰る思いであった。体育の今井孝造先生の時間だけが、先生の豪放な感じの故か、私には解放された時間であった。当時の運動部の花形と言えば赫々たる戦績によりラグビー部を第一としたが、その猛烈な練習振りは新入生の私たちには一種の脅威でもあった。ある日、その「ラグビー部」が私の所にもやって来たのである。まるで帝国陸軍古優勝！ インターハイ県予選

(S三〇・七)



岸 峰村 沼賀  
田村 佐藤  
桜井 今井先生 生方

参上等兵と言った様子の彼は、ラグビー部へ入らない理由を盛んに問い詰めたものだ。「柔道部へ入りました」と私は苦し紛れの嘘をついた。「もう一度考え直せ」と彼はあきらめ難い表情で言った。

私は、翌日柔道部へ入部を願ひ出た。当時は、鈴木元一氏（県柔道指導部長）が主将、副将は須藤裕久氏であった。県下のトップクラスの実力を持った柔道部であった。この年、鈴木主将は見事国体出場を果している。私は、入部はしたものの一向に稽古する気もなくサボりにサボっていたが、どうした訳か対前高定期戦において活躍する事が出来た。そこで同期の新聞部永田邦彦君（山陽国策パルプ）が、「我らのホープ」と題して今後期待される新入生を特集しているから顔を写させろとやって来た。私は頑固に拒んだ。すると彼は私だけ顔写真なしで記事にし、その末尾に「彼は、見掛けはごつくて取っ付き難い感もあるが、時々大恋愛論を展開するロマンチックな一面もある」と書き立てた。これには参った。中には、にやにや笑いながら近付いて来て、「おい田村、恋愛論を一つ聞かせてくれよ」と言う仁もあった。私は、しばらくの間、顔を上げて通学する事が出来なかつたのである。

私が二年の時の主将は冬木金雄氏（五四回・冬木工業）であった。その年は、これと言った戦績は残していないが、レギュラーとして出場させて頂いた。同期には沼賀勝平君（宝産業）・平野展司君（司土建）・峰村義雄君（興和石材）などがいる。一年後輩の生方将夫君（五六

回・パーマジョーレ）・桜井君（県柔連普及部長）・佐藤岳男君（五六回・新潟県庁）らは忘れる事は出来ない。特に佐藤君の左内股のすごさは大したものので、彼は翌年個人戦でトップに躍り上つてしまった。

三年の時には、石井清一君（五七回・榛名高校）・岸泰徳君（五七回・東京農業大学第二高校）と言った大物も入部していた。大宮市で開催された関東大会において、岸君は、当時関東一の実力とうわさされていた明治大学付属明治高校の田中三段を得意の跳ね腰で見事にたたき付け並み居る人々をアツと言わせたのであった。私たちがインターハイ県予選で優勝を決める事が出来たのは、この様な先輩・後輩のお陰である。

昨年のある朝、上毛新聞を読んでいた父が「オイ、お前の名前が出ていゝぞ」と呼んだ。見ると、「わが師わが友」欄に、桜井君がインターハイ県予選準決勝の話を書いていた。それは、今井先生がその豪放闊達さの中にいかに緻密な作戦を用いたか、その例え話として私の名前も上げてあったのだ。その年、つまり昭和三十年には、我が柔道部は伊勢崎高校（現伊勢崎商業高校）に苦杯をなめさせられていた。なかでも大川二段は、一年生で国体出場を果すと言った猛者で、インターハイ県予選の準決勝であった。このインターハイ県予選の準決勝で、又しても伊高とぶつかってしまったのだ。私は副将として出場し、それまでは順調に勝つて来たが、牧野二段に小内刈を決められってしまった。私は、畳に手ついてあや

まったが、どうも泣いていた様だ。悔しくて泣いていたと言うよりも、もうこれで何もかも終了だ、柔道部ともお別れだと言う寂しさが急に込み上げて来たのだ。しかし頭は至って冷静で、試合中に彼の太田君が「左だ。左の内股だけに気を付けろ」と相手に声援していたのが耳に強く残っていた。二年生の捨身の頑張りで代表戦にもつれ込んだ。私は、今井先生に「お前行け」と言われて大川君と対峙した。「右」で取るしかないと考えていた。組むや私は、彼が最も警戒しているはずの左内股を仕掛けた。待つてましたとばかり彼は私の背後へ回ろうとして体を右へ移動させた。その一瞬、私は方向を転じて右内股を思い切り深く掛けた。決った。見事に決ったのである。

私は、後にも先にも、取り組む前に作戦を考えそれがうまく決つたのはこれが始めてであった。あの時の感触をまだ忘れずに覚えていゝのは一体どうした訳なのであろう。

決勝は勢農と行い、3-2でこれを破つた。優勝。九州へ行ける。それが何よりの喜びであった。二一年振りのクラス会に出席してみると、「柔道部の田村」と皆が呼んでくれた。そう言えば、当時の私から柔道を取つたら、結局何の思い出も残ってはいないのだ。あの頃柔道をやっておいて良かったと思う事は、今になって随分ある。それは、「ラグビー部」のお陰であったかも知れない。（五五回）

昭和三十一年度関東大会（千葉）

柔 道 部

青春の絆 2



柔道部三十八年

清水 勇治

「黒帯」。洗い込んだ柔道着に締められる黒い一帯は何となく落着きを漂わしてくる。試合場に双立した選手の気配はたまたまなく良い。柔道着の洗濯で、指先が擦り切れる程にまみ洗いをした思い出がある。入部して初めての柔道着は、先輩の残して行った幾分つんつるんのもので、もちろん白帯であった。私の柔道の始まりである。この白帯で一、二度試合にも出させてもらったが、勝った記憶はない。ところが、試合に出ているとほとんどが黒い！いつの間にか、自分の帯も黒くなって澄していた。

比較的体軀のそろった我々が、県大会では優勝の二歩手前まで、あえ無い敗戦を繰り返していた。昭和三十八年、関東大会は大宮で開かれ、群馬からは前商・前高・館高・高々が出場した。今も思い出に残る一戦は、日本大学第二高校との試合である、この前日、今井孝造先

生は、日大二高の監督が先輩である事から、「お手柔らかに」と挨拶したところ「試合の上で」とのやり取りがあったと聞く。先鋒・宮原秀夫(六三回)引分、次鋒・富沢茂(六四回)負け、中堅・関口茂樹(六三回)に回生の一勝を期したが敵も譲らずに決め技なく引分、形勢不利かと思われたが、副将・白井雄一(六三回)は寝技に入り送り締め一本勝。声を限りの檄で五分と五分の大將戦、自分の番である。内股が利いか判定で勝った。今思えば、試合の上での堂々の返札ではなかったらうか。しかし、次の習志野高校戦では、早くも力尽きて敗戦となってしまった。

またこの年、関口は湯浅(前商)明治大学(主将)を破り、松山市での全国大会に出場、国体へも参加している。OB会名簿を手にすると、当時のメンバーは中程に記載されており、早くも、五年が経ようとしている。同期には桑原雅之・桜井登・中島隆夫・野尻和男・竜神正彦がいて、一緒に稽古に励んだ。春夏の合宿がやはり強く思い出される。特に、鈴木元一先輩の率いる県警機動隊の諸氏に手玉に取られた事や、パリの第二回世界選手権にも出場した古賀五段(当時)の講習などは、見る事やる事が全て新鮮であった。

柔道部で恒例となっている相撲であるが、「翠樹体育」第三号で清水貞保先生(三〇回)がまとめられた運動部県外派遣費で相撲大会費が大きな割合を占めているのを見て驚いている。昭和三十七年の全国大会に先立つ県大会で、私は出る

と敗けだったが、高々は羽鳥修司(六三回・卓球部)の異色、内掛のさえて出場権を得た。この時、城田昭夫先輩(六二回)が自分を大会参加者から除いて私を入れてくれた事に気付かず、私の憤みの無い事を今井先生から教えられ、今でも思い出す始末である。色々な出来事と一緒に過せた柔道は自分の中で大きな自信となって来ている。今ホットな話題は巨人軍の王選手七五六号に沸いているが、スランプに対して納得するまで練習を繰り返すという王選手の言葉を思いながら柔道部時代を振り返ってみた。(六三回)

柔道と私

庭田 登志男

卒業して初めて夏合宿に顔を出してしました。合宿所が新しくなり、校舎・グラウンドが余りにも素晴らしくなったので、なんだか高々ではないような気がして、寂しいようなうらやましいような気がしました。

私が二年の夏合宿の時です。参加者が五人で、先生・先輩の方が多いという惨めな思いをしました。もつとも当時は、二年が四人、一年が八人しきおらず、普段の練習にも支障を来す毎日でした。このような状態で、入賞はとてども考えられない事でした。それでも優勝を目標とした昭和四十三年の関東大会県予選と全国高校総体県予選を書いています。関東大会県予選は、先峰東瀬朝紀(六九回)・次峰神宮裕(六九回)・中堅庭

県高校総体を迎えて(S四四・五)



有野 神宮 清水 深井 東瀬 金井  
桑野 大塚 大沢 黒沢 高井 湯浅

田・副将清水隆夫(六九回)・大將根岸三明(六八回)というメンバーで臨み、準々決勝で万年二位の利根商業高校に0-3で敗れました。上位六校の関東大会出場をかけた、既に出場の決定したベスト4のほか、残り二校の権利を準々決勝で敗れた四校が敗者復活戦により勝ち取る事になりました。高々は、沼田高校と当り、2-2で代表決定戦に持ち込みました。最初私が引分になり、次の東瀬にすべてをかけた。が、ちよつとしたすきを突かれ一本負けを喫し、惜しくも出場権を逃してしまいました。しかし、同じメンバーで出場した相撲の関東大会県予選では優勝するという、柔道部として皮肉な結果に終わりました。

現役最後の大会、全国総体県予選には何としてもベスト4に入るという意気込みで、一年の有野嘉弘(七〇回)を大將に換えたほか、前回と同じメンバーで全

場に乗り込みました。又しても準々決勝において利根商と当りましたが、当大会において前回と並び優勝候補と目されていた利根商は、新たな闘志に燃えていた高々を甘く見過ぎていたようでした。まず、神宮が敗れ東瀬と私が勝ち清水と有野が分けて2-1で念願の三位に入る事が出来ました。しかし、準決勝では勢農に1-4で敗けるといふ不満足な結果に終りました。

八年も経た現在、当時の部の状態においては一応満足の行く内容だったのでと思えるようになりました。やはり優勝を掌中に収めるためには、人並以上の努力が必要であります。その事を思うと、私たちの練習はまだ不足していたとは思っています。しかし、遊びたい盛りの年頃でしたので、柔道から解放される事は自由を意味していました。二度とやるまいと思つた柔道でしたが、いつの間にか再び柔道の魅力に取り付かれ、道場通いをしていく私です。(六八回)

**苦戦 柔道・相撲**

田淵 吉二

私が入学した昭和四十六年当時、高々柔道部は、県下でベスト8、うまく行つてベスト4といった成績であった。三年生には桑原利雄さん(七一回)を始めとする強者がいてしかも体型も大型であったから、私共には手も足も出なかつた。その先輩たちも、県大会に出て行くと、最後まで勝ち抜くことは出来なかつた。上には上が幾らでもいるものだと、しみ

じみ感じたのもその頃である。県下では前商・利根商といった所が首位争いをしており、前商にはその後中央大学で活躍し今年の世界選手権大会予選に出場し善戦している梶沢さんがいた。

さて、私が三年の時には、二年生を含めかなりのメンバーがそろつたのでこれならばとインターハイ県予選に向けて猛進した。先峰石関秀一(七三回)・次峰矢島裕一(七四回)・中堅 今井均(七四回)・副将金井健(七四回)・大将田淵

である。組合せのふたを開けて見ると一回戦で優勝候補の前商と当つた。上位進出をねらつたのであつたから、どこと当つても勝たねばならなかつた。しかしこの時、少しひるんだ感があつた。前半技ありの優勢で一点取られ、大将戦に持ち込まれた。私は何としても一本を取らねばならなかつた。若しくは技ありを取つて延長戦に持ち込むかであつたが、そんなと前商には巨漢千秋君(現在法政大

学柔道部)がいたので勝つのは難しかつた。相手は二年生の小兵で、私の方に歩があつたのであるが、彼としてもここで引き分ければ勝てるという頭があつたに違ひなく、勝負に出てこなかつた。受けの体勢の相手を捕えるのは難しく、気ばかり焦つて、技は単調になつていた。寝技の攻めも行つたが、とにかくしぶとくて時間切れとなつた。期待を一身に受けての臨戦であつたが、引き分けてしまつた。仲間の顔が見られなかつた。この後前商は順調に勝ち進み優勝した。私と大将戦をした青木君は、確か翌年度の軽量級県下チャンピオンであつたと思う。結局

一回戦負けということになつてしまつたが、あそこで何かの拍子にひよつとして勝つていたなら高々が優勝していたのではなかつたかとは、OBとなつてからのピールのつまみである

次に高々の相撲は、県下では伝統的に強かつた。といつても、参加校は六、七校であり、どこも柔道部と兼ね合せていた。その中で樹徳高校だけは相撲部を有し、いかにも相撲取らしい体型で臨んで

来ていた。専門にやつていない者同士の相撲であるから、すり足とか腰の低さといった基本動作にも余り気を捕われず、思い思いの型で取つていた。そのため、柔道の技が決り手となることも度々である。特に内股が決つた時などは、回りでうなり声ともつかぬ笑い声があつた。

私が二年の時には、それまで出場していなかつた富高が大型柔道部員を擁して臨んで来た。それまで、伝統と動きの良さで、圧勝を誇つていた高々も、力の前に屈して二位に甘んじてしまつた。この時は山形県で全国大会が行われたが、青森県十和田市で催された全国高校選抜十和田大会に二位の高々が出場した。結果は予選リーグで敗退であつたが、思わぬ遠征旅行を体験出来た。

最後に、私事になりますが、今年の第三二回青森国体に、茨城県選手として出場することになりました。日も押し迫つた現在、朝夕稽古に励んでおります。高々柔道部のOBとして、最善を尽くして頑張りたいと思います。(七三回)

カットの写真 練習風景

東瀬朝紀、大沢豊を背負う

有限会社 吉田モーターズ

代表取締役

吉田 浩 一(五〇回)

安中市安中一―一九  
電話〇二七三(八二)二三二五

真宗大谷派 本照寺

住 職

東 秀 和(五一回)

碓氷郡松井田町松井田九四一  
電話〇二七三(九二)〇二七四

大井接骨院

大 井 宏(五一回)

安中市板鼻二〇九九―二  
電話〇二七三(八二)一四九七

三井シャッター工業株式会社

代表取締役

橋 爪 楨 雄(五一回)

高崎市中大類町六三七  
電話〇二七三(五二)七六一

## 高々運動部に

## 期待する



峰  
哲彦

翠樹体育会の運営も軌道に乗り、会報の発行も第四号を迎え、会が大きく前進しているのは喜ばしい事です。県高校総体の総合成績において高々が上位にランクされている事は、運動部全体が県内のトップクラスにあり、部活動が活気にあふれている様子がうかがえて、大変うれしい事でありませう。部員数も最近はこの部も多いと聞いていますが、これも運動部の活躍の大きな力になっている様に思われます。この様な現在の高々運動部の活躍をながめて、私が昭和三十六年に高々に赴任した当時の運動部、特に庭球部の姿を思い出しながら、感じた事を書きつづつてみたいと思ひます。

校内には中庭のコートしかなく、練習は市営コートで行われていました。市営コートには市内の高校が全部集まって、お互いに良いライバルとして技を競い合ひ、今年には高商には負けられないうう様にお互いの励みになっていました。高女・高市女も一緒に練習していたので女

子校との交流もあり、また試合も男女一つの会場で出来た時代であったから応援にも熱が入っていた様です。当時は庭球部の全盛時代が過ぎて少々低迷していた頃で部員数も少なくなっていました。市営コートには若手OBがよく集まって後輩の指導に当り、昔の全盛時代を徐々に取りもどして昭和三十七年に遠藤潤・鈴木毅組(六二回)、翌三十八年も大沢宏海・下山万吉雄組(六三回)が国体に出場する事が出来ました。OBの指導もさることながら、当時の選手は練習熱心だったといえます。ひたむきにテニスに取り組む姿勢があった様に思いますが、今の選手にそれが見られないのは残念な事です。

その後昭和四十年、敷島ブロックKK社長吉野庸三氏(二〇回)の援助と現県軟式庭球連盟理事長須藤清氏(三四回)のお世話で剣道場の裏に吉野コートが完成し、水・土曜は市営コート、他は校内で練習する様になりました。水・土曜に部員が市営コートへ行った留守に、職員がテニスを楽しむという風景も見られる様になりました。昔から職員のテニスは熱は相当なもので、中庭のコートを職員が使っていた時代もありました。昼休や放課後ばかりでなく、授業中の空き時間にもテニスをやっていたという良い時代もあった様です。吉野コートが出来てからは、吉野コートを中心として職員のレクリエーション大会が行われたりして、一段と熱が入って行きました。職員テニスが盛んであった事は、伝統的に高々の庭球部が県下のトップクラスにある事と大

いに関係があると思われませう。生徒たちが汗水流して努力している姿に対する理解が、そこから生れて来るのではないでしょうか。

昭和四十六年には翠樹会館が完成して合宿所の施設も整い、昔の合宿所で合宿生活を送った当時を思うと全く今昔の感があります。台風の後合宿所一階の部屋が水浸しになりバケツで水をくみ出した、観音山の虫という虫が合宿所の光目掛けて飛び込んで来て強力なバルサン香を焚き人間までいられなくなる程煙をもうもうと出していた時代が懐かしく思い出されます。環境に恵まれ過ぎてしまうと甘えてしまい悪い面が出て来る事もありますが、良い環境で最高に力を伸して行くのが一番良い事だと思います。

テニスコートも、四面の立派なコートが完成しました。水はけの良さ、コート面の良さは、県内のどのコートにも負けない立派なものです。この立派なコートを十二分に活用して練習に励んで行けば、立派な選手が育って行く事と思ひます。四〇名の部員でも、四面のコートがあれば十分に練習が出来ます。密度の濃

い練習を積んで、長年の夢である団体優勝を飾ってみたいと思ひます。OB会も、立派なコートが完成した事を切っ掛けとして、大いに後輩の指導に当らなくてはならないと思ひます。

現役選手の指導に当る場合に、現在の生徒の氣質を良く知った上で指導する事も必要ではないかと思ひます。現在の生徒を取り巻く環境は、昔とは比べものにならない程難しくなって来ています。受験競争も一段と激しくなって来ています。状況もあります。その中で、学業面でも運動面でも、人並以上の成績を上げて行くには不屈の精神力を必要とするのはいうまでもない事です。現在の生徒は、ややもすると安易な方向へ走ってしまう傾向があります。練習も、決められた練習時間が終ればすべて終りと割り切っている様に思われます。練習の中で納得が行かなければ、終つてから自分一人でも努力してみようという姿は見られなくなつてしまいました。これからは、一人でも二人でも、そうした選手が出て来る事を期待しているのですが、指導者としてのOBは、現役選手に部の伝統的な精神を植え付け、それが現役選手の精神的なバックボーンとなつて行く事が必要であらうと思ひます。高々運動部のそれぞれの部の持つカラーの底に流れるフェア・プレーとファイティング・スピリットの精神が永遠に受け継がれ、高々運動部が今後ますます発展して行く事を期待しております。

(五五回・庭球部 高崎女子高校教諭

元高々庭球部顧問)



第32回青森国体  
軟式庭球成年女子監督として  
中列左から2人目(S52・10)

# たんぽぽの唄

門倉 諫

たんぽぽが さきました  
 ほんのすこし  
 あたりが あかるくなりました。  
 この街の路地のおくのみちばたに  
 だれも気がつきはしなくても

つめたい風を両手であたためて  
 やさしく春をうたっている たんぽぽ

たんぽぽが さきました  
 ほんのすこし

風が やさしくなりました  
 この街のくるまが走るみちばたに  
 だれも立ちどまりはしなくても

つめたい風を両手であたためて  
 やさしく春をうたっている たんぽぽ

たんぽぽが さきました  
 ほんのすこし

そらが あかるくなりました  
 この街の雨あがりのみちばたに  
 そつとなにか話しかけるように

太陽の光で からだを染めて  
 やさしく春をうたっている たんぽぽ

(五二回・陸上部)

## たんぽぽの唄

詩 曲 門倉 諫  
林 彰雄

たんぽぽ が さきました た ほんの すこ し  
 あ たり が あ かる く な り ま し た  
 この ま ち の 路 地 の お く の み ち ば た に  
 だ れ も 気 が つ き は し な く て も つ め  
 た い か ぜ を 両 手 で あ た た め て や さ し く は る  
 を う た っ て い る た ん ぽ ぽ



イタリアンレストラン ヴィノ

真 木 昭 (五一回)

高崎市連雀町五九  
電話〇二七三(二六)三二六四

歌えるバブ・レストラン  
プレイ・パツハ

吉 田 秀 雄 (五一回)

高崎市九藏町二七  
電話〇二七三(一七)〇四三二

勝俣産婦人科医院

勝 俣 真 (五一回)

高崎市上豊岡町一八六  
電話〇二七三(二四)〇二八三

カワナベ工業株式会社

代表取締役  
川 鍋 順 一 (五一回)

高崎市矢中町七九八一四  
電話〇二七三(四六)三〇七五

## 特別寄稿

見えない  
優勝旗

高々山岳部顧問

高橋 信男



じゆうたんを敷き詰めたような芝生に彩られた新装グラウンドを見ながら、思わず長居をしたその在任の年月の長さを感ずる。

私が本校に赴任したのは昭和二十八年四月。鳥川から観音山のすまで見渡す限りの麦畑、その果に高々のでこぼしなグラウンドがあった。現在の体育館はなくて、最近取り壊された剣道教室が雨漏りのする生徒控所兼体育館であった。時代も時代だったが、時の田中悦平校長（一七代）は、教育は物質的環境ではないというのが持論だった。「イギリスのセントルマンを養育する名門イートン校では、ネルソンの落書の残るぼろ机で今も勉強している」。これが、欧米視察旅行から帰った田中校長の教訓だった。貧しい施設・設備の中で、しかし生徒たちは意気軒昂だった。四km以内徒歩通学という規定に文句もいわず、むしろ大部分の生徒が素足に下駄で石ころ道を歩くこ

とを意気に感じていたが、一方全校マラソンに猛反対したりした。創立記念行事として行われる季節外れのマラソンは、有害無意味だというのが生徒たちの主張であった。ついに、二十八年度の全校マラソンは中止された。その年の秋、ラグビー部は国体で全国優勝という快挙をなし遂げた。前任校前橋女子高校での甘く優しい夢からまだ覚めやらぬ私がほうり込まれたのは、そんな汗臭くほこりの吹きすさぶ男の子の世界だった。

赴任早々、若い先生は必ず運動部の顧問になって欲しいと要請された。戦時中からスポーツといえは剣道しかやったことのない当時の私は（剣道は戦後禁止されてまだ復活していない）、体力さえあればやれると思って山岳部を選んだ。これは認識不足だった。女子高生たちとはよく登山やスキーをやった経験はある。——ひそかに自負していた私にとって、それからの山行引率は正にしごきの連続

となるのである。

春合宿の谷川岳マチガ沢では、絶えず雪崩の危険におののいた。生徒と一緒にやる雪溪の滑落停止訓練でぐっしりぬれたシャツや靴下は、時に吹雪に急変するテントの寝袋の中に抱いて寝て体温で乾かす。夏山の北アルプス、立山縦走では、谷から吹き上げる霧の岩場で手足がすくんだ。肩に食い込むザックの重みと豆の擦りむけた足裏の痛みに泣き泣き一週間、年甲斐もなくホームシックにかかると。寝袋の下を豪雨が流れても、疲れてぬれながら眠る。パン・ジャム・ソーセージという献立が毎日繰り返される昼飯を、それでも食わなければ歩けないから水で流し込む。雪中幕営の冬合宿では、昼はスキーで楽しいものの、夜は地獄。奥万座の猛吹雪には、一時間置きに起きては雪に埋るテントを掘り出した。

しかも山岳部活動は、常に死と背中合せにある。昭和三十三年春、入部して間もない一年生吉原君が裏妙義で転落死した。最もポピュラーな尾根コースで起った事故だった。校内に山岳部廃部の声も上がったが、立派な部活動こそ正しい対処の仕方だとして存続させた。この遭難事故は、今も私をさいなむ。

山岳部は、他の運動部のように、学校の名声を挙げ栄光に輝くということがない。山岳部が世間をにぎわすのはむしろ暗いニュースが多い。個人的には、後にヒマラヤ派遣隊に選ばれた関章司君（五三回）のように栄光の人もいるが、昭和三十三年に山岳部は部に昇格して初めて部費を持ったのだが、その審議の部長会

議でも、山岳部は学校を代表し得ないとして反対があり時の部長吉田高嶺君（五七回）は悔しがって泣いた。登山が競技になったのは最近である。しかしそれでも私は、山岳部を高々運動部の一員として誇りにしたい。合宿で部員全員があえぎながら山頂に立った時、彼らは眼に見えぬ優勝旗を手にしている。栄光の踏跡が大自然に刻み込まれたのだ。私が顧問になってから一五〇人に及ぶ山岳部員が巣立つたが、皆部活動を通してたくましく育ったと思える。それは、OBとなつて社会的な働き手となつた現在も通用している。時々OBの何人かと酒をくみ交しながら、山の歌をうたい、思い出を語り、そして現況を聞く時にそう思うのである。

私も県高校体育連盟登山部の現役顧問の中で、最高令となつてしまった。体の続く限り山岳部とは離れられないのだから。

(国語科)



妙高高原にて (S40・3)

第三一回

高々・前高定期戦



定期戦を終わって

実行委員長

紋谷 久仁彦



高々のグラウンドが新しくなって初めての定期戦だっただけに今年は何としても勝ちたかったのですが、惜しくも負けてしまいました。

序盤・中盤と前高の一方的なペースで一時は三〇点近いリードを許し、終盤に激しく追いつけたのですが結局及びませんでした。一般対抗では、昨年の勝利が偶然でなかったことを立証するように昨年以上の大差を付けて勝ったのですが、当初予想されたように部対抗が苦戦を強いられ、各部ともよく戦ったのですが後一步の所で前高に逃げ切られてしまった部が多かったようです。

戦い終わって感じたことは、力や技ではなく、前高生の意気込みに負けてしまったようです。しかし、今年は一 generally 出場する選手たちも自発的に練習した人が多く、大変いいムードで臨めたと思います。そのためか、負けた後に多少「残念だ」という気持はありましたが、後めたさはありませんでした。

最後に来年のことですが、今年主体となっていてくれた実行委員が多く来年

まで残ってくれますし、一般の力も年々向上してきますので、今年の負けを教訓として全校一体となって前高に乗り込めば、必ず良い結果が出ると思います。来年の高々生の奮起を期待し、今年の負けをおわびして終りにします。

第31回 高々・前高定期戦 得点表

		水	野	陸	卓	庭	バ	バ	剣	柔	駅	サ	ラ	綱	体	小	総
		泳	球	上	球	球	レー	スケ	道	道	伝	ッカー	グビー	引	操	計	計
高々	部	0	0	0	6	6	6	0	0	0	0	6	6	0	0	24	64
	一般	3	0	1	9	8	4	6	6	6	6	9	9	0	0	40	
前々	部	6	6	6	0	0	0	6	6	6	6	0	0	6	6	42	74
	一般	6	9	8	0	1	5	3	3	3	0	0	0	0	32		

(高々一五勝一敗三分一中止)

事業報告

昭和五十二年

- 二・二〇 理事会：高松荘
- 三・一 卒業式・同窓会入会式に会長・副会長出席
- 四・二〇 「運動部への勧め」を一年生に配布
- 四・二八 定期総会  
：タカシマヤローズ  
全校マラソン上位入賞  
六名にトロフィー贈呈  
業者のグラウンド修祓  
式に会長・事務局出席
- 五・二〇 役員会：菊寿し
- 七・二〇 第一回編集会議
- 七・二八 全国高校総体出場者に  
銭別  
バスケット部  
陸上部 渡丸 覚  
九・一〇 国体出場者に銭別  
水泳部 須藤 聡  
一〇・二 本会主催のグラウンド  
修祓式  
一一・一〇 第二回編集会議  
一一・二三 ラグビー部三〇周年記  
会祝賀会に会長出席  
一二・一五 第三回編集会議



滝沢製粉有限公司

代表取締役

滝沢 勇 (五三回)

高崎市昭和町五〇  
電話〇二七三(二)五二五三

吉井中央診療所

江原洋 一 (五五回)

多野郡吉井町四一五  
電話〇二七三八(七)五八八九

株式会社 群馬総業

常務取締役

岸 秀 夫 (五五回)

高崎市大橋町二〇〇  
電話〇二七三(三)一四六四

島田産婦人科医院

島田 秀 穂 (五五回)

高崎市巾着屋町一一  
電話〇二七三(二)四〇九七

## 特別寄稿



## 野球部長一年生の記

高々野球部顧問

石 沢 信 久

長い間野球部長をなさり幾多の足跡を残された岡田由重先生の後を受けて、去る四月に野球部長に就任して早五カ月が過ぎ去った。吹く風も肌寒く感じられる頃に始まった西毛リーグ、それに続く春の大会、こうして今年も例年のようにシーズンの開幕となった。その頃は改修工事で練習をする余地など全くなかったグラウンドが、秋の関東大会予選を迎えようとしている今では黒々とした土の内野と眼に泌みるような緑の芝生の外野の姿を変え、そこでは総勢一八名の部員が連日汗にまみれて白球を追い力一杯バットを振っている。この立派なグラウンドを提供するために力になって下さった多くの方々から感謝すると同時に、一段と決意も新たに進んで行かなければならないと思う。

三年五名・二年九名という陣容でスタートした今年のチームは、一〇数名の新生を迎えて大いに活気を呈するようになった。部長就任後の初の公式戦は、春の大会一回戦の対富岡高校戦であった。鈴木広康(二年)が好投手広木からセンターオーバーのホームランを打ったが1

12でリードされた三回に雨が激しくなつてノーゲームとなり、翌日再試合が行われその結果延長一五回で112で敗れた。投手戦の末、互いに無得点で迎えた一五回表に伊知彰彦(三年)の三塁打を足場に一点を取った時には「勝てた」と思ったが、その裏勝利を意識して単調になった小林均(三年)が打たれて二点を失い一瞬にして敗戦の淵に追いやられた。接戦で勝ち切ることも難しさや、常に冷静さを保つことがいかに重要であるかを知らされた一戦であった。

夏の大会は、初戦に佐波農業高校と当り111の大差で圧勝した。しかし内容的には余りほめられたものではなく、選手たちは試合後監督に活を入れられた。次の試合は、高崎工業高校を相手に逆転劇を演じて意気上がる桐生工業高校で、練習試合では一敗一引分と勝てなかった相手であったが、三点を先制し、中盤に追い付かれはしたものの、最終回に三点をもぎ取ってベスト8に進出した。準々決勝の対戦校は、西邑楽高校・利根商業高校を文字通り一蹴して順当に勝ち上がって来た桐生高校であった。このチーム

にも練習試合では苦杯を喫しており新聞等の子想もすべて岡高有利であったが、接戦に持ち込めばあるいはという期待もあった。結果は小林の絶妙の投球と伊知地・鈴木の好打で4-0と勝利を収め、七月二十四日に北関東大会の出場を懸けて太田工業高校に苦戦したとはいえず予想通りに勝ち進んで来た富高と対戦することになった。昨秋以来再三顔を合せながら一勝も出来なかった相手であるが、ここまで来れば何としても勝ちたかった。

小林の調子から見て三点以内に抑えてくれることは間違いなく、打線が広木を打てれば勝機もあると思っていた。しかしこの試合の広木は、他の試合と違って最高の出来栄であった。相手よりヒットが多かったのにタイムリーが出ず、逆にミスが出たり、詰った当りで点を取られたりして、正に球運に恵まれずついに0-2で敗れた。試合終了直後スタンドの「ありあ、今年もだめか」という声を聞いた時、猛暑の中を連日熱心に応援していただいた方々に申し訳ないと思うと同時に、選手たちを「よくやった」とねぎらってやりたい気がしたものであった。

進学校の宿命とはいえ入試競争のあおりを方々から受け、グラウンド改修のためにジブシー暮しを余儀無くされ、一〇数年間高々野球部に関与して来た高橋正親監督(社会科地理)が初めて率いた勝率五割に満たなかったチーム。そのチームが県下のベスト4まで進出したことは、選手・監督の努力はもちろんであるが、物心両面から援助して下さった後援会・OB会・父兄会の方々に心から感謝をし

なければならぬと感じたのであった。ともあれ以上のような結果で夏の大会は終了したが、今年のシーズンはまだ終っていない。秋の大会を控えて、一・二年生の新チームは連日練習に精を出している。彼らが、技量の未熟さを気力でカバーして、先輩を凌駕する域にまで達するのを期待しているのは、私ばかりではないと思う。ともかく今後も、学校の内外を問わず、高々の野球に関係するすべての人が、一つになってひたすら一つの目的に向かって進む状態が続く限り、過去において果せなかつた夢、甲子園原頭で「翠樹」を謳歌することも可能になるような気がする。関係各位のなお一層のご援助と叱咤激励をお願いする次第である。(四六回・英語科)

完成間近い野球場(S五二・五)



昭和52年度 高々運動部活動状況

(S52・9・30)

第12回県高校総体入賞校 (男子)

種目	成績	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
陸上競技		中之条	渋川	中央	農二	富岡	伊商
バスケットボール		桐工	高崎	中央	農二	富岡	伊商
バレーボール		高商	高崎	富岡市商		前商	前商
軟式庭球		高商	農二	太田	太工	前高	前中
卓球		桐丘	高商	沼樹	田徳	桐新	工島
ラグビー		高崎	太田	前中	橋央	前商	商生
サッカー		前工	新島	農高	二商	藤生	岡川
ハンドボール		吉井	富岡	前工	藤岡	桐生	前商
ソフトボール		新島	樹徳	吉井			
体操競技		高工	伊商	太工	前工	中央	桐生
相撲		高崎	桐市商	農二	中之条	勢農	大間々
登山		沼田	渋川	中之条	伊工	伊東	高工
バドミントン		太市商	新島	桐生	生工	育農	英二
柔道		前商	利商	高崎	高利	商農	高商
剣道		育英	高崎	高利	商農	沼田	田橋
軟式野球		中之条	桐南	桐生	生工	伊商	市工
レスリング		高工	大泉	館林	林川	関館	学大
弓道		富岡	桐生	前商	伊工	玉村	利商
自転車競技		育英	高工	安中	伊商	前工	前商
ボクシング		伊工	育英	渋安	川中	板倉	
ウエイトリフティング		育英	利農	前工	藤工	高工	
フェンシング		沼田	前工	育英	蚕糸		
庭球		前商	伊東	太田	田橋	桐生	伊商
空手道		高商	渋川	農二	高工	万場	伊商
水泳		利商	高崎	農二	高商	高工	中央

第12回県高校総体総合入賞校 (男子)

1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
高商	前商	高崎	渋川	前工	農二
63	51	51	50	48.5	47.5



野 球 部

- 春季大会
  - 高々1-2 富岡高 1回戦 (延長15回)
- 夏季大会
  - 高々11-1 佐波農 2回線 (7回コールド)
  - 高々6-3 桐生工 3回線
  - 高々4-0 桐生高 準々決勝
  - 高々0-2 富岡高 代表決定戦
- 秋季大会
  - 高々5-4 藤岡高 1回戦
  - 高々3-4 樹徳高 2回線

国 体

- 水泳部
  - 須藤 聡 100m自由形 子選(落)
  - 800mリレー 子選(落)
  - 400mメドレーリレー 子選(落)

関 東 大 会

- 陸上部
  - 波多野重雄 100m 準決勝(落)
  - 200m 子選(落)
  - 渡丸 覚 110mハードル 決勝6位 <全国大会へ>
  - 400mハードル 決勝7位
  - 町田 勲 110mハードル 子選(落)
  - 高々 400mリレー 子選(落)

- バスケット部 (Bブロック)
  - 高々 89-59 東京・巢鴨高 1回戦
  - 高々 91-64 茨城・東洋大牛久高 2回戦
  - 高々 91-68 神奈川・鎌倉高 準決勝
  - 高々 106-67 東京・国学院大久我山高 決勝

- バレー部
  - 高々2-1 東京・芝高 1回戦
  - 高々2-0 千葉・九十九里高 2回戦
  - 高々0-2 神奈川・藤沢商高 3回戦

- ラグビー部
  - 高々30-26 千葉・銚子市立高

- 剣道部 予選リーグ
  - 高々0-5 茨城・日立一高
  - 高々3-2 千葉・安房農高

- 柔道部相撲班 (団体) 子選リーグ
  - 高々1-4 東京・安田学園高
  - 高々3-2 茨城・水戸農高
  - 高々3-2 神奈川・相洋高
 (個人)
  - 清水 統 無差別級ベスト16

- 水泳部
  - 須藤 聡 100m自由形 子選(落)
  - 200m個人メドレー 子選(落)
  - 小川 淳 100m平泳 子選(落)
  - 400m個人メドレー 子選(落)
  - 倉林 武美 200m背泳 子選(落)
  - 美細津 正 100mバタフライ 子選(落)
  - 200mバタフライ 子選(落)
  - 高々 400mリレー 子選(落)
  - 高々 800mリレー 子選(落)
  - 高々 400mメドレーリレー 子選(落)

全国高校総体

- 陸上部
  - 渡丸 覚 110mハードル 子選(落)
- バスケット部
  - 高々77-98 青森・弘前実業高 1回戦

# 先輩、頑張ってます

現役の活躍 その1



及ばず、一回戦が非常に惜しまれた。来年の頑張りを期待している。

## 関東大会に出場して

### バレー部

三年 金子 大司

高校男子バレーボール関東大会は、六月四・五日、茨城・古河市にて開催された。高々バレー部は、三日に宿で一回戦の作戦を立て翌日の試合に臨んだ。その日は何が何でも勝って二日目に残ろうと意気込んでいた。

ところが、一回戦の東京・芝高校戦は楽勝と思われたが、第二セットあと二点という所で逆転され落してしまった。そして三セットまでやって、むだな体力を消耗させてしまった感じだった。

高々 2	15   6	13   15	15   8
	0	1	芝高

二回戦は、皆気合いを入れ直して、千葉・九十九里高校と対戦した。この試合は楽勝だった。

高々 2	15   8	15   6	15   6
	0	九十九里高	

三回戦は、問題の神奈川・藤沢商業高校とであった。これに勝つと、念願がかなって五日に残れるのだった。試合が始まると、前半は高々がリードしていたが逃げ切れず結局は逆転負してしまった。

高々 0	10   15	10   15	2
			藤沢商

皆開始ばて気味で、一日三試合の消化は少し苦しかったようである。

## 第二五回関東大会

### ラグビー部

二年 村田 毅

第二五回関東高校ラグビーフットボール大会は、六月四・五日、宇都宮市の栃木県総合グラウンドに、精鋭四二チームが集結して華々しく開催された。

この大会は、他に例を見ないラグビー独特の対抗戦形式で、勝敗を競うのではなく飽くまでも「他校との親睦を計り、ラガー」として飛躍するためのものをより多く得る」ということをモットーとして行われるもので、高々は参加校中最多の二三回目の出場をなし遂げた。対戦相手は千葉・銚子市立高校であった。

前半は押し気味で、スクラムトライで好調な滑り出し。すぐトライを返されたが、その後はモール・ラックで圧倒。バックスもよく走り回り、24-4で前半終了。しかし、後半は暑さにだらけ、前半の大量点も手伝ってタックルが甘くなり銚子に穴を突かれ、途中独走トライ(ゴール)などもあったのだが走り負けて加点を許し、後四点差という所でノーサイド。30-26で薄氷の勝利をつかんだ。

ノーサイド後はミーティングが持たれた試合の反省、今後の強化点などが話し合われた。

当日は、前日までの天気かうそのように晴れ上がり、真夏を思わせる炎天下での試合だったが、全力を出し切れないうちにノーサイドとなつてしまい試合に悔いを残したことは誠に残念で、今後のチーム作りに課題を残した大会となった。

耳鼻咽喉科  
気管食道科

松山病院

松山真一 (五五回)

高崎市柳川町六一  
電話〇二七三(三三)三三三三

相原製鉄株式会社

代表取締役

相原 武 (五六回)

多野郡新町二〇八四  
電話〇二七四四(二)〇八七一

株式会社 池野定次商店

池野栄一 (五六回)

高崎市栄町一六一一三  
電話〇二七三(三三)六〇〇五

イシザワ書店

石沢 毅 (五六回)

高崎市大橋町一一一  
電話〇二七三(三五)九二〇三

## 関東大会報告

### 柔道部 相撲班

三年 藤巻 秀文

今年の関東大会は、翠巒祭の日に、東京の靖国神社で一都八県から四三校が予選を勝ち抜き出場した。

初日、団体戦一・二回戦二試合が行われた。我々は、東京・安田学園高校と対戦し、1-4で惨敗した。

この日の午後より重量別個人戦が行われ、高々では軽量級三人・重量級一人・無差別級二人が出場し健闘したが惜敗した。この中でも目立つのは、無差別級のベスト16に入った清水統(二年)の活躍であった。

二日目は、団体三回戦と決戦リーグが行われた。高々は、茨城・水戸農業高校に3-2、神奈川・相洋高校に3-2と辛勝したが、二勝七点で決勝リーグには

堂々の初優勝—関東大会—

バスケット部

三年 紋谷 憲爾

第三一回関東高校男子バスケットボール選手権大会は、六月三日に開会式、六月四・五日に八王子市の市民体育館・八王子工業高校・片倉高校の三会場で開催された。三二チーム(A・B各一六)で争われた。

我が高々バスケット部は、大会前の下馬評—クラスメートA「おいB、関東大会一回戦はどこと当るん?」。部員B「東京五位の巣鴨だよ」。A「そんなじゃ一回戦負けか」。B「まあな」。また各部員とその家族ともそんな会話がされていた—を見事に覆して勝ち進み、関東大会初優勝の偉業をなし遂げたのである。

六月三日朝、高崎駅前に集合したら、これまた関東大会に活躍が期待される高々バレー部が出発のため集合して、バレー部顧問菊池俊二先生(五二回・保健体育科)の「おい、お前ら何お土産買って来る」に、バスケット部員「はい先生、優勝ですよ優勝」などと、その時点では冗談染みた会話が行われたりした。

昼頃に宿舎に着き荷物を置いて練習に向かい、その日の中に開会式を済ませた。

—周囲にやたらとデカイやつが多くて圧倒されそうになったが、後から思えば、やつらは皆見掛け倒しのデクだった。—宿舎に帰り夕食後ミーティングを行ったが、その時の川嶋尚武先生(四九回・保健体育科)の「明日は勝負を気にせずに戦おう。小さいチームが大きいチームを食う事だつてあるんだ」とい

う言葉で大分気が楽になった。その夜は皆、闘志が余ったのか、かなり騒いで歌ったりしたため、怒られたやつもいた。宿舎は、高尾山のふもとにあり環境申し分なかったが、田んぼが周りにあったためい〇〇たカエル(〇〇の中は「ま」ではありません。答「じけ」)がうるさく安眠妨害であった。

六月四日。一回戦は巣鴨高校で、そこも優勝候補だったが、地力で勝る高々は中距離シュートをびしびし決め、前半で勝負を決めてしまった。—開会式の時巣鴨のやつらは、入口にある組合せ表を一回戦で高々に負けるとは知らずにスイスイと優勝の所まで指で持つて行くという大それたたわけ事をやっておった。バカモノめ、正義は勝つのだ。—

高々89—59巣鴨

二回戦は、午後なので次の相手はどこだろうと見ていたら、何と茨城・東洋大学附属牛久高校という頭に大きなひさしの付いたこわいお兄さんが沢山いる所で、

試合の前に圧倒されそうになった。いざ試合が始まってみると何て事はなく、やはり前半で勝負を決めた。あんなにこわく見えたお兄さんたちも案外と面白い人たちで、試合中話なぞもしてしまった。

高々91—64東洋大牛久

そうして危なげなく一・二回戦を勝ち抜いた高々選手たちが、宿舎に帰りミーティングを済ませた後の会話。A「おい、簡単に勝ちちゃったなあ」。B「そうだな、こんなもんなら優勝しちゃうぜ」。A「んじゃあ優勝しちゃう?」。B「しちゃうか?」。A「しちゃう」。—



第31回関東大会 (八王子市) (52・6・5)

高々 106 (32—33) (74—24) 67 国学院久我山

ついに午後の決勝を迎えた。相手は東京・国学院大学久我山高校。久我山は一回戦で破った単鴨に負けているというので、試合前から楽勝ムードになっていたのがいけなかった。前半は互角の勝負になり32—33とリードを許し、後半を迎えた。しかし気を締めて掛った高々のプレスにあつという間に逆転、後は一方的な高々ペースで試合が進み、結局決勝戦は大差、しかも百点ゲームというおまけまで付いて高々の大勝利。

桜井接骨院 順道館桜井柔道場

桜井 弘(五六回)

高崎市飯塚町一〇四〇 電話〇二七二(六一)二五〇二

高野薬局

薬剤師

高野 政博(五六回)

高崎市真町 六五 電話〇二七二(二二)三三九〇

レストラン タカシマヤローズ

支配人

安藤 維郎(五七回)

高崎市常盤町一三三三 高崎セントラルハイツ 電話〇二七二(二七)一八七六

関東大会の四試合で高々は平均得点九四・四点・平均失点六四点という結果が示すようにオフエンス・ディフェンス共に絶好調であり、先輩の駅での伝言板の励まし「言葉「高々頑張れ!」(あえて名前を出しません)、更に合言葉「勝っちゃうか?」を心の支えに、初優勝を達成したのである。

# 先輩、頑張つてます

現役の活躍 その2



## 関東大会を終えて

### 剣道部

三年 小池 政一

六月十日

浅名監督率いる高々剣道部一六名は、高崎発六時五七分の各駅停車で、さつそうと一路茨城・鹿島町へと向かった。

途中これといった事はなかったが、ただ、千葉駅で電車の待ち合せをしていた時、何の前触れもなくクリーム色に赤い線のある電車が入って来た。それは間違いないと特急だった。鹿島神宮行き『あやめ』と書いてある。こんな物に乗って行く者がいるのだろうかと思つてふと車内をのぞくと、何と高崎商業高校と埼玉・皆野高校がいたではないか。畜生、特急で行ったからといって勝てると思つたら大きな間違いだぞと思つていたら、案の定、予選リーグで敗けていた。それと佐

原駅でどこかの団体が伊勢崎女子高校の剣道部に、「一緒に入りませんか」といつて断られたのが印象的だった。

さて旅館に着き荷物の整理を済ませ、小雨の中を鹿島小学校へ練習に行った。体價しにたつぷり掛り、その後山梨・甲府商業高校と合同練習をした。

六月十一日  
いよいよ大会の幕開きである。最初の試合まで時間があるので鹿島小で練習。その間に、茨城・日立第一高校が千葉・安房農業高校に勝つたという知らせが入った。

高々と日立一の試合が始まった。体が思つたように動かない。いつものような技が出て来ない。調子に乗れない内に0-5で敗けてしまった。

次の安房農との試合は、大分落ち着いて確実に本数を取って行き、副将の所で勝負が付き3-2で勝つた。

確かに力の差も多少あつたが、それに勝る気力を養って行かなくてはと思う。

## 関東大会報告

### 陸上部

三年 波多野 重雄

今年の関東大会兼全国大会北関東予選は、六月十七日十九日、太田市菅陸上競技場で行われました。高々陸上部は、県大会を勝ち抜いた一〇〇M・二〇〇M・一一〇Mジュニアハードル・四〇〇Mハードル・四〇〇Mリレーの五種目に出場しました。

大会当日はあいにくの雨で、アンツィ

カーに水たまりが出来る程の悪コンディションで、記録的には今一歩でしたが、一一〇Mハードルで渡丸寛(三年)が入賞し一年振りに全国大会への出場権を獲得しました。

成績は次のとおりです。

- 一〇〇M 波多野 準決勝五位
- 二〇〇M 波多野 予選五位
- 一一〇Mハードル 渡丸 決勝六位
- 町田勲(二年) 予選六位
- 四〇〇Mハードル 渡丸 決勝七位
- 四〇〇Mリレー

斉藤新吉(二年)・篠原英基(二年)  
住谷 悟(二年)・山内忠浩(二年)  
予選七位

## 弘前実業に惜敗

### インターハイ

### バスケット部

三年 佐藤 三千翁

高々バスケット部は、六年振り、川嶋尚武先生が来られてから初めてのインターハイ出場でした。

OB・父兄の御声援と御協力を頂いた結果、七月三十一日早朝、二・三年部員二二名、顧問二名、OB一名は、一年生やOBと高崎駅で『翠樹』を共に歌い、一路島根・松江市へと向かいました。松江には午後六時頃着き、電車を降りた時のむつとした暑さは、その三日後に今年最高の暑さを記録した事を予期していたようです。

八月一日  
午前中に松江北高校新体育館で練習を

したのですが、この時ちよつとしたハブニングが起りました。高々の練習会場が松江北高体育館と書いてあったので、暑い中を一五分も歩いて会場へ行つたのです。しかし、そこは試合会場で、練習会場は旧松江北高体育館でタクシーで一〇分位離れていると言ふのです。皆がつかりしてすわっていると、そこはやっぱり皆の気持ちがよく分つている川嶋先生です。一〇位会場の役員と激しい話をした結果、新体育館を練習に使わせてもらう事になった訳です。新体育館を使つたのは松江北高と高々だけで、練習に使用してはいけなかつたのだそです。

午後は、待ちに待つた開会式です。役員や松江農林高校の恩田佐千子さんらのあいさつに始まり、『友よ/清く、仲よく、たくましく』のスローガンの下、同じバスケットボールをやっている全国の代表が様々なユニホーム姿で松江市立体育館に集まつたのです。初出場校あり優勝候補ありで、その様子は何とも言えず明るく活気に満ちていました。

八月二日

午前中軽くウォーミングアップ。そして午後四時、夕方とは言え三〇度以上の暑さに加え無風に近い中、ついに試合が始まりました。相手は、春の全国大会で四位、今大会も台風の目として雑誌などで騒がれ、起高校級と言われる選手がいる青森・弘前実業高校でした。

前半、四分まで2-4と両方共ショットやパスのミスが続きましたが、一〇分で9-20とリードされました。高々は、関野誠・紋谷憲爾(三年)の活躍で一五

分には21―27と六点差に迫りました。しかし、このままのペースでもう一息と言う所で一〇ファウルになってしまい、相手は力のあるチームで前半終った所で31―43とちよつと離されました。

後半、六分までシーソーゲームでしたが一二分まで53―77と離され、しかも二人退場してしまいました。ここで相手は全員メンバーチェンジ、そしてオールコートマンツーマンボイフュンスに切り替えて来ました。高々も反撃して一八分で74―89と追い上げ、一緒に行った高崎市立女子高校やOB・父兄が遠路はるばる応援に来て下さったのですが、時間がなく77―98と負けてしまいました。

この試合は、とにかく暑さとの戦いでもありました。しかし、皆暑さに負けまいと一丸となって頑張りました。夜の反省会でも、よくインターハイまで来て強豪弘前に善戦し頑張ったとたたえ合い、遅くまで話し込んでしまいました。

電車の子約が八月五日のため、三日は松江市内や他校の試合を見学しましたが弘前は三回戦で大阪・初芝高校に負けてしまいました。四日は、出雲大社を拝観し、近くの海で泳いで来ました。

このインターハイに出場した事は、試合はもちろん他の事も、一生の思い出になると思います。また、OBになってみないと分らなかつたのですが、後輩にインターハイに出場してもらおう事が俺一人でもなくOB全員の夢なのです。そんな事も考えて、後輩に今まで以上にプレーをしてもらいたいと思います。

### インターハイを終えて 陸 上 部

三年 渡丸 覚

今年の全国高校総体の陸上競技は、岡山市で行われた。僕は一一〇Mジュニアハードルに出場し、結果は一五秒二〇で予選四着だった。

この二年半、僕は、インターハイ出場を最大目標として頑張つて来た。そして今、それが果せた事をうれしく思っている。あの雨の中の北関東大会で、予選・準決勝を勝ち残り、決勝で六位入賞を決めた時には全身に喜びを感じた。そしてそれは、僕の一生の最も大きい出来事の一つとなるものであった。あの興奮は、二度とは味わえないものかもしれない。とても素晴らしい経験であった。去年は北関東で予選落ちをしてしまい、今年は多少不安があつたけれど、会場が地元の太田であつたので気分的に楽なレースが出来て幸せであつた。やはり、勝手の知れた場所であるのは心強い。特に、審判の顔を知っているという事は何か安心出来た。

インターハイの会場は、二、三年前に改装したばかりだったので、大変奇麗だった。けれども、一番暑い時間だったのだ、日陰の少ない事には閉口した。とにかく、あの連日の猛暑の中の練習には手を焼いた。あんなに汗をかいて走つた事は今までにはなく、Tシャツは水浸しという感じだった。

ところで、全国大会は皆さぞかしすごいのだろうと思つていただけけれど、見た感



渡丸、110Mハードルの奮闘  
全国高校総体(岡山) (S52・8)

じは県大会と何ら変りはない。そして、だれも皆高校生であり、自分と変る所など全然ない生身の人間なのだという貴重な発見をした。変に恐れるから大きく見えるのであつて、大きく構えていけば皆凡人に見えるのである。皆さんも覚えておいた方がいいですよ。特に、入試の際などには。

僕は、特別に猛練習をした覚えがない。ただ、練習はほとんど毎日出席した。その結果インターハイに出場出来たのだ。多少天性の素質というのに関係したかも知れないが、やはり毎日の積み重ねが大切だつたと思う。それに気が付いただけでも僕の高校生活はむだではなかつた。高々へ来て良かった。陸上をやつて良かった。これは、僕にとって一つの勳章である。

最後になりましたが、陰になりひなたになり応援してくれた小林馨先生(保健体育科)を始め諸先生、陸上部の先輩・仲間、同級生、そして理解を持ち自由させてくれた両親に深く感謝致します。

石井接骨院 修道館石井柔道場

石 井 清 一 (五七回)

群馬郡榛名町中室田一九四  
電話〇二七三七(四)〇〇四七

カネツ商事株式会社

堤 克 弘 (五七回)

高崎市天神町八八  
電話〇二七三六(三三)〇二

細谷外科小児科内科医院

細 谷 崇 (五七回)

高崎市沖町一五五  
電話〇二七三三(四三)〇二二〇

高崎バッテリーングスタジアム  
本多スポーツ

本 多 饒 (五七回)

高崎市浜尻町一〇三  
電話〇二七三六(二一)七五六

## 後輩よ頑張れ

今年の反省 その1

走ろう  
卓球部

三年 金井 広一

まず第一に、少ない時間で能率よく出来たと思うが、何か一日一日を惰性でやって来たという所もあった。やはり、部員の一人一人が自覚と計画性を持たなければならぬ。それらが、一日の練習を充実したものにしてくれるだろう。

その次に、もっと走り込んで足腰を鍛えておけばよかつたと後悔している。やはり、どんなスポーツでもマラソンは欠かせないものであり、試合で勝ち抜いて行くためにも体力が必要である。だから後輩たちはマラソンを多くやってほしいと思う。いや、やらなければだめだ。それから、練習時間であるが、他校と比べると少なかつた。進学校である高々にとつてこれはどうしようもない事で、

その分内容のある練習をやるしかない。しかし、練習量には到底かなわないというのが実感であつた。

この一年間の体験——苦しかった合宿、楽しかったキャンプ、一生懸命頑張った新人戦や県高校総体など——をいつまでも大切にしていきたいと思う。

欲しい厳しさ

## 柔道部

三年 藤巻 秀文

この一年間を振り返ってみて感じる事は、従である相撲に比べて主である柔道が不振だつたということです。

相撲では、新しいチームになつて初めてのインタハイ予選こそ三位でしたが、新人戦では優勝して高知で行われた全国新人大会へ出場し、県高校総体でも優勝して関東大会へ出場し、専門の相撲部を相手にかなり健闘しました。一方柔道においては、対前高定期戦では大差で勝利を収め昨年の敗北に報いましたが、第一の目標だつた関東大会出場は果せませんでした。敗者復活戦に残つたのですが、もう一歩及びませんでした。

いい試合をしていながらあと一歩がないというのが、柔道では多かつたようです。この「あと一歩」というのが勝負強さのことなのかもしれません。こう考えると、練習に厳しさがなかつたのではないかと反省せざるをえません。一・二年生には、こういうことも念頭において、柔道の不振をばん回するように頑張ってもらいたいと思います。

練習を反省して

## サッカー部

三年 坂田 一宏

六月に新チームを結成し、約一カ月後夏休に入ると同時に合宿がありました。四泊五日の短い期間でしたが、練習内容は濃くかなりきついもので、合宿に耐えたという事は大きな自信になりました。

九月に入ると、選手権予選が始まりました。一次リーグでは二勝二敗、得失点差の結果二次リーグに進み、更に二勝一敗で決勝トーナメントに進みましたが、優勝した前橋工業高校に負け、結局ベスト8に終わりました。そのすぐ後の高崎市民大会では、高崎商業高校にPK合戦の末勝つて優勝し、結成後まずまずの滑り出しでした。

しかし、年が明けて新人戦がありましたが前橋高校に二回戦で、五月の県高校総体では一回戦で桐生高校に敗れてしまいました。その間練習試合もしましたが引分試合が多く、勝つ事がないままインターハイ予選を迎えました。相手は藤岡工業高校で、押しまくりながら得点出来ず、速攻で点を入れられるという非常に惨めな負け方でした。

敗因は、何といつても練習不足です。例え練習はしていても、皆の中に甘えがあつて、所々で怠けていたためだと思えます。そんな軽い気持で勝とうとした事自体、虫がよすぎました。大変ショックでしたが、今から考えたと負けをくしくして負けたという気がします。私は今、キャプテンという役を終えて

ほつとしていますが、大会で勝てなかつたのはやはり残念です。一・二年諸君には、我々三年の二の舞にならぬよう、ぜひ勝つて欲しいと思います。負けるという事は寂しいものです。

筋の通つたチームに

## バレー部

三年 金子 大司

先生の力をなるべく借りず、自分たちでやれる事は何でもやって行こうという自主的な部活動を目標に我々は出発しましたが、何一つとして自分たちでは出来ませんでした。何かに付けては先生を頼つてしまい、逆に先生に引つ張られるという始末になつてしまいました。

我々としても最善を尽した心算でしたが、今考えてみると、まだまだ努力が足りなかつた様です。そしてつくづく感じた事は、チームプレーに一番大切な、思いやり、人の事をよく考えて物事をするという事が、我々には一番欠けていた様です。苦しくなると、自分の事しか考えられなくなり、その自分さえプレーに集中出来なくなる事がよくありました。これが、万年準優勝という屈辱的な結果に終つた原因だと思えます。

だから後輩には、是非、精神的に強い一本筋の通つたチームを作ってもらいたいと思ひます。そして、我々の達成出来なかつた夢を実現してもらいたいと思ひます。

最後に、色々な方に御支援をいただき誠に有難うございました。

真の団結を

応援部

三年 小坂橋 正人

去年の秋に抱負を書いてから早くも一年が過ぎ去ろうとしている。この一年、応援部にとって一番大きな収穫は野球以外の応援であろう。今まで応援部と言えば野球と言ふ考えが一般的であったが、バスケット・バレーの応援を通して、野球がメインだがそれだけに執着してはいけぬ事を悟り、もっと大きな意味での応援と言う一つの目標が現れた様な気持ちである。体育館での応援に恥しきはなく雰囲気の違いに少しとまどったが、母校が勝利を得た後の校歌はやはり胸を打つものがある。

ここで一つ高々生に言いたいのは、色々な場所へ応援に行きいつも感じるのだが一般生徒の数が大変少ない事である。特に、野球では三年生が多く、一・二年生の姿が余り見られないと言う状態で、一・二年生にも少し運動部への関心が欲しい所である。そして高々生全体は、三F精神をもう一度見直してもらいたいと思う。

また、野球以外の応援と言う新しい目標を持った応援部への期待の一方、部員数の減少による応援部の弱体化が引退するに当って気掛りである。僕たちの努力の無さが応援部に対する理解を深められなかったと言う事が原因の一つと思うが、世間一般の応援部に対する悪評、ここ数年來の高々生の三無主義などもそこにある様に思える。二つ目の理由の後者につ

いては、去年の秋の抱負にもあり僕なりに努力したつもりだが、生れつきの性格のせいか少し弱気な点があり事を強引に押し進める態度が無かった事を残念に思う。過ぎた事を今更言っても仕方がないが、生徒諸君に応援部をもう一度見直してもらいたい、新主将金沢初生君には僕たちと過した一年を反省の糧としその飛躍を期待する次第である。

波乱万丈の一年

山岳部

三年 丸茂 吉成

一時は三〇人という史上空前の部員を抱えていた昨年の活動を顧みる時、まず思われることは、顧問の先生方にとっては御苦労が多かったことと思われま

す。昨年の合宿に際してはコースや設営地に苦しみ、殊更設営用具となると部費と部員数の不釣合に苦しみ久しくほこりをかぶったテントを捜し出し穴をふさいで使い、県高校総体では診査員から「メーカーから感謝状が来る」と言われるようなコッヘル(ナベ)を使うと言った具合で、三〇人から生じる新たな問題まで生れ、波乱万丈な一年でした。そんな下で、夏山合宿は白馬方面、冬は野沢へ、そして春の谷川と合宿を行いました。一二人の二年生が中心となった今、九人の一年生を指導し、クラブ山行はもとより個人山行においても意欲的な活動が行われています。

自分に打ち克て

野球部

三年 白石 尊信

新主将として私がいま目指したものは「卒先」と「冷静」。

しかし実行出来たかというところではあくまで疑問であり、主将という立場を除いて一選手として考えてみた場合も同様であった。それは高校野球というものに對する甘さで、すなわちそれは自分自身に對する甘えなのであった。大会の結果はともかくとして、そこに向かつて突き進んで行く過程を絶対とする高校野球に

とってはそれは許されない事なのだ。大会である程度の成績を取められたのはチームとしてのまとまり以外になく、特にその点では自慢出来るものであったといいたい。

黄金時代いっまでも

バスケット部

三年 橋爪 恒二郎

我々が誇れるもの、それは他のどんなチームにも負けないチームワークだと思

う。強烈な個性を持つ部員一人一人、各人の持味を十分に発揮しなおチームの和を失わなかったこと、これこそインターハイ出場の第一の要因であったに違いない。川嶋尚武先生(四九回・体育科)の御指導の下、技術面・精神面での向上を目指した一年であった。昨年夏の強化大会優勝の後、一月の新人戦決勝リーグで桐生工業高校・高々・



第31回関東大会 (八王子市) (S 52・6・4)

中央高校が同率となりわずかの得失点差で二位に甘んじたのが今でも残念だ。この大会は、代々木第二体育館で行われる春の全国大会予選の関東大会への出場権が懸っていた。バスケットを志す人なら誰でも一度はそこでプレーをしたいと夢見る代々木。二位となったことで、その夢は破れた。春の県高校総体も、決勝で桐工に敗れ二位。しかし、その後の関東大会でBブロックながら優勝を遂げたことは、それがそのままインターハイ予選の優勝の導火線となったことを考えると大きな意義があったと思う。関東大会は、一戦一戦を精一杯、無欲で戦ったことが勝因だと思う。

試合の結果だけ簡単に振り返ったが、練習では、OBの方々の協力や効率を良くするための川嶋先生の方針などがこの数年でも最も充実していたように思える。三年生はそれぞれ違った道を歩むが、これからはOBの一員として、高々バスケット部の発展のために微力ながら協力出来たらと思っている。

# 後輩よ頑張れ

今年の反省 その2



先輩方にも、合宿、その他で大変お世話になり、感謝すると同時に期待に十分答えられなかった事を申し訳なく思っています。しかし、私たちは私たちに精一杯やって来た心算で、悔いはありません。私たちが過して来たこの一年をよく反省して、二年生にも頑張ってもらいたいと思っています。

## 希望を高く

### 体操部

三年 湯浅 和之

我々体操部員は、春の県高校総体上位入賞を目指して、毎日練習を重ねた。ここで上位入賞と言ったのは、日本一の実力がある高崎工業高校には勝てないと言

## 闘志を燃やせ 剣道部

三年 小池 政一

この一年、私たちは、「ねばり」のある剣道をやろうという目標を立て、毎日苦しい稽古に励んで来ました。しかし今こうして振り返ってみると、この目標をほとんど達成出来なかったように思いません。

昨年選手権で優勝して以来、新人戦三位、県高校総体二位、インターハイ県予選三位と優勝を目の前にしながらも今一つという所で勝つ事が出来ずに涙を飲みました。関東大会にも出場しましたが、本来の実力を発揮する事が出来ず、予選リーグを突破出来ませんでした。やはりもう一步という所の粘りが足りず、何が何でも勝つという闘志にも欠けていたようです。

うあきらめがあったからだ。試合前から優勝の望みを破棄していたと言う事実に対しては、周囲から声援を送ってくれる人たちには大変申し訳ないとは思う。しかし、県内のどの高校においても我々と同じ気持であるという事は、他校の選手たちの話からも推察出来る。この一種の絶望感は、古くから群馬県の伝統として今も残っている悪い因習であり、いつかは乗り越えなければならぬ厚い壁である。

ここで、客観的立場に立って思慮を巡らしてみる。すると、暗く天上を覆う雲の間から輝く太陽の光がさっと射し込むかの様に、ある考えが浮んでくる。これが希望と言うものだろう。つまり、我々高々体操部が、群馬県で優勝すればその時は日本を制覇する時である。禍を転

## 気力の充実を

### 陸上部

三年 波多野 重雄

陸上部は、四月十七日のリレーカーニバルを皮切りに今シーズンにスタートしました。

昨年と同じように三年二名・二年六名と少人数で、しかも二年主力部員の故障と先行き不安なスタートではありましたが、春季大会で四〇〇Mハードル優勝。西毛でも三種目優勝・総合四位とまああの滑り出しを見せ、五月の県高校総体でも延六種目に入賞(四〇〇Mハードルは優勝)、関東大会に出場しました。昨年はここでストップでしたが、今年は一〇Mジュニアハードルで北関東入賞し全国大会へも駒を進めました。

今までの主な成績を述べましたが、まず今季前半を振り返って言える事は、部員数が増したためか低辺の層が厚くなった事でしょう。まだ県では入賞出来ない者も、西毛辺りではかなりいい所まで行っていますし、一年生にも良いものを持つた者が多く、七月下旬に行った強化合宿でもかなりの成果を上げました。このような中堅どころが伸びて来れば、九月の学校対抗でも良い成績が残せると思います。

次に、今年はシーズン初頭から故障者が多く、中にはまだ練習に参加出来ない者もいます。原因は色々あると思います。生活面でも練習中でも、自分でもっと気を引き締めて行く必要があると思います。



中野校長を囲んで—水泳部—

第28回関東大会県予選 (S 52・7・17)

### 全力で ラグビー部

三年 横山 和幸

念願であった国体出場こそ成らなかつたが、この一年間僕たちは精一杯やって来たと思う。秋の全国大会県予選こそ準決勝で敗れたものの、冬の八人制大会は一・二年共に優勝し、その勢いに乗り、五月の県高校総体に優勝、関東大会も勝ち、全群馬として国体地区予選に出場して決勝まで進んだ。

この中でも特に印象に残るものは、八人制、会準決勝でノーサイド前に逆転した東京農業大学第二高校戦。国体予選で、SH大河原義仁(三年)の逆転の四〇M独走トライで勝った全長野戦。猛暑の中、敗れたものの素晴らしいモールが出来た全山梨戦。だが何ととっても、総体決勝の太田高校戦が最高だと思ふ。納得がいくまで続けられたミーティング。誰一人しやべろうとしなかつた朝食。そして、土砂降りの中でチーム一丸となつて戦い勝利を得、部員全員が肩を組み合つて歌つた部歌。これらは生涯忘れないと思ふ。

しかし、新ヒーム結成当時は五〇点以上の大差で敗れる試合もあり、部員数こそ多かつたが、個々の技術・力は例年より上とは言えないものであり、前途は安易なものではなかつた。だが、部員全員が真面目に毎日練習をして、冬の間は約一〇kmのマラソンと強筋運動を続けた。そして、数々の合宿・遠征やOBとの練習試合、スクラムマシンや中原射鹿止先

生(五五回・保健体育科)の新しい練習の成果が、前記したような結果を生んだと思ふ。

僕自身としては何かリーダーとして物足りないと思うが、全員の協力、特に小池敏・橋谷徹(三年)が積極的にチームを引っ張ってくれたことが、ここまでやってこられた大きな要因になっていると思ふ。

とにかく、目標の全国大会出場はまだなし遂げられていないんだ。もう一度、秋の試合に勝負をかける心算だ。

### 明日の躍進を期待して

### 庭球部

三年 吉本 泰

今日、引退してから始めて庭球部の練習をのぞいて来た。後輩たちの日焼けした真黒な肌とそろそろ色が抜けて来た自分のそれとを見比べる度に、最後の試合が終つてからまだ二カ月ばかりしか経っていないのに、もう随分と長い時間が過ぎた様な錯覚におそれ少しばかりの感傷を味わう事も出来た。見たところ、彼らは大分真剣に練習に取り組んでいる様である。

思えばこの一年、ろくな成績を残せないまま終つてしまった。新人戦でベスト16に一チーム入つた位で、団体戦は常に16止り、関東大会にもインターハイにも駒を進められなかつた。だから下手な事を言うと言訳がましく聞えてしまうが、そうする事で自分たちの不成績を取り繕う気は毛頭ない。ただ、失敗は失敗とし

て認め反省し、それが後輩の指標となれどと思ふだけだ。

部活動を行うのに一番大切なのは部内の和だとよく言われるが、そればかり追いつめるのは愚行としか言い様がない。チームワークは二次的なもののつまり練習後の連帯感から来る副産物で、単独に掘り出せるものではない。精錬済の金が埋まっている金鉱など有り得ないのだ。一年前僕はこの考えに立ち自分なりに一杯頑張つた心算だったのだが、部の責任者たる使命感・義務感に捕われた僕の一

方的な突進が、一部の部員たちとの間にずれを生じさせたのは至極自然な成行きだったのかも知れない。彼らは事あれば練習をサボろうとするし、僕は苛立つしで、溝は広がって行くばかりだった。だがそんなある時、機会を得て互いに相手への文句を思う存分ぶちまけたところ、休みが目立つた者も僕の気持を分つてくれたし、僕も独り善がりな押し付けを反省し、その結果あれだけ深かつた溝が見る見るうちに埋め立てられて行くのを感じた。だけど結局、この程度の成績しか残せなかつたのだから、偉そうな口は叩けまい。

今年も顧問も代られれば新生高々庭球部出発の年だったのだが、いかんせん実力が及ばなかつた。だが、あの長嶋巨人も一年目は屈辱の最下位に泣いた。しかし、二年目は一転してリーグ優勝と言う荣誉を勝ち取つた。この大逆転の秘密を探り出し物にすれば、来年は高々の物である。

### 鈴木接骨院

鈴木 行 正 (五八回)

群馬県群馬町金吾三〇七  
電話〇二七三三(三)〇一〇八

### 吉野洋食器

吉野 宏 一 (五八回)

高崎市常盤町五二一  
電話〇二七三三(二)五二九四二

### 栄寿亭

若林 元 (五八回)

高崎市新町八  
電話〇二七三三(三)二七四〇

### わりた宝石店

割田 兼 弘 (五八回)

高崎市寄合町四八  
電話〇二七三三(二)五六二〇

# 先輩、今年も頑張ります

## 現役の抱負 その1



### 心の触れ合いを求めて

## 柔道部

二年 中野 昌明



部活動は、皆が一つにまとまって、自分たちの手で造り上げて行くものだと思う。そのためには一人一人が、部員である事を自覚し、自主的に参加し、一つの目的のために一致団結する事が必要だと思う。

それに加えて、部員同志の心の触れ合いを大事にして行きたい。同じ釜の飯を食った仲間が、生涯の友になるかも知れないのだから。失われつつある人と人との心のぶつかり合いが、部活動にはあるような気がする。

今、私たちの目の前には前橋高校との定期戦がある。これは、何が何でも勝た

なくてはいけない。そのために、皆が丸になって練習に励んで行きたい。

### 甲子園を目指して

## 野球部

二年 鈴木 弘康



完成したグラウンドは、芝生を外野に敷き、内野には良質の砂が入り、水捌け

の良さは抜群です。一雨降れば二、三日使えない時もあつたグラウンドが、今では少々の雨は苦にせず、大雨が続いても一日晴ればほとんど大丈夫という具合です。こんな素晴らしい、しかも美しいグラウンド、県下の公式戦で使われてもいい位立派なグラウンドでプレー出来る僕たちは幸せです。

このグラウンドを作った下だった諸先輩の御好意に対して、一番のお返しは、これまで果せなかつた夢、悲願であつた甲子園出場の切符を手に入れる事だと思っています。

今、島方昭夫監督(六二回)以下二年八名・一年七名が、一丸となって練習に取り組んでいます。野球はチームワークが勝負を決めますが、それと同時に、個人一人一人の精神力と総合力が大試合の勝につながるのです。また、春には新入部員も入り、より一層盛り上がって行きます。

厳しい諸先輩の視線を受け、それを励みとして、僕たちは高々の名に決して恥まないよう全力で戦い抜きます。

### 好きだから

## サッカー部

二年 山田 保



昨年度のサッカー部の成績は、冬の大会を除いては期待した程良くなかった。

その原因は、部員一人一人の胸に反省材料として残っていると思う。勝負の世界は厳しいと、昨年のサッカー部を通して痛切に感じている。今年は、何としても昨年の失敗を繰り返さない様にしたい。その意志を、今年度のサッカー部の成績に反映させたいと思う。

僕は、部員たちに望む事がある。もちろんそれは私にも適合される事だが、まず毎日の練習に真剣に積極的に臨んでもらいたい。まじめさと積極性があれば、いやでも技術は上達する。それから、サッカーをもっと好きになって欲しいという事だ。「好きこそもの上手なれ」という言葉がある。確かに、これは真理である。好きになる事こそ上達への早道である。「なぜサッカーをやるのか」と聞かれたら、即座に「好きだから」とただ一言で答えて欲しい。私の望む事はそれだけである。いい部員たちばかりで、他に望む事はほとんどない。

今年から、全面芝生のグラウンドが使用可能なので、心機一転の心算で頑張りたいと思う。県下一流のグラウンドに恥じない様な成績を、部員たちと作り上げて行きたい。そして、高々生活を充実させるものにしたいたいと思う。理想論ばかりか

も知れないが、とにかく物事をやり始めるにおいては、意気込みが大切なのではないだろうか。一年後には、どんな結果が待っているか分らない。それを決めるのは、部員たち自身であろう。言葉には余り出さないが、やはり皆、全国大会に目標を置いていっていると思う。

### ぶちやぶる!

## ラグビー部

二年 高橋 博



八人制大会・新人大会・県高校総体・全国大会県予選という

ように、県内無敗で快進撃を続け県内全タイトルを獲得した。

よく「チャンピオンは辛い」と言われているが、全くその通りだと思う。しかし、チャンピオンはチャンピオンの座を死守しなければならぬと思う。新チームは、個人的技術では前年度より少々落ちるだろうと思われるが、そこは練習量と精神力、それにチームワークでカバーして行きたいと思っている。これからの練習は、まず走力をつけること。そしてタックル・スクラム・モール・ラックなどのような基本的なプレーを、正確に基本に徹して強化して行きたい。そして前年度の成績を基盤として、高々ラグビー部の伝統に恥じないように、日夜精進して、前年度のチームでも厚かった国体・全国大会出場の際を鋭い当りでぶち破ってやろうと思っている。

# 卓 球 部

二年 中田 康宏



まず現在の部員数から言うと、二年三名、一年は例年にはない多人数が入部し

一六名。この中にはかなり有望な人材もそろって、これからの高々卓球部をどンドン盛り上げて行ってくれるであらう。

さて今後の練習方法だが、二年はもちろん一年も第一期の練習、夏季合宿、夏休の練習などを経てそろそろ高校卓球にも慣れて来たと思うから、目標をしっかりと立てて練習に励んで欲しい。また短時間練習であるので、内容がより濃くなるように考えた練習をして欲しい。しかし、それがどんなに良いものであっても、短時間であればやはりそれだけの成果しか現れないと思う。ではどのようにしたら卓球というスポーツが、人より強くなるのであろうか。それはどんなスポーツについても共通に言える事だが、人の何倍も何十倍もの努力をしようと事だと思ふ。そうすれば、努力した分だけの成果は必ず現れるのである。また努力をした者が、最後には必ず勝つのである。これは二年、一年を問わず言える事であり、また最も大切な事なのである。ではこのような練習は何を目標にして行かうかと言うと、県の大会などで、三回戦の壁を突破する事を困難としていた団体戦で優勝、若しくは準優勝を狙い、ま

た個人戦でベスト32以上に食い込む部員をより多く出るようにし、今まで県のレベルで中堅位にいた所を上位クラスまでもって行きたいと思う。今年の高々卓球部ならば、それは不可能ではなく、必ずなし遂げられるのである。

## 大自然との対話

### 山 岳 部

二年 青木 幹昌



登山とは一風変わったスポーツである。相手は「山」という大自然。そこには、

勝敗なんてものはない。登山とはこの大自然との対話である。こんなスポーツを好む人間の集まった山岳部。この山岳部を、一年間まとめて行くのが私の仕事である。あれもこれも、やりたい事が沢山ある。その中で、自分たちのやれる事を努力して行きたい。

まずその中で一番大きなものは、合宿の充実である。昨年から三回に減ってしまった合宿を充実させる事は、大きな意義があると思う。次に、個人山行の活性化。そして、これらのための日頃のトレーニング。これからは、体力を付けるだけでなく、机上での山の知識の修得なども積極的にやって行きたい。この知識の修得によって、結び付きにくい縦のつながりを強めたいと思う。最後に、私は、「自分たちの力で計画し実行する自分たちの山岳部」を目指して行きたいと思う。

## チー ムの和を大切に

### バスケット部

二年 神戸 敏之



高々バスケット部は永年の伝統があり新キャプテンとなった現在、その伝統の

重さをひしひしと感じています。もちろん、伝統というものは大きな財産であり大切にしなければいけないと思つていますが、伝統に押しつぶされてしまつては逆効果ですからそうならないよう心構えをしています。

さて新チームですが、部員三〇名(二年一三名・一年一七名)というかつてない大所帯です。ところが、背の高い選手が少ないというのが例年通りの悩みで、今年も小粒のチームとなりそうです。そのためデフエンスの強化、スピード・シュート力の増強などが課題となっております。

しかし我がチームは、昨年一年生大会では優勝をしましたし、この三〇名という部員が一つにまとまりチームに和が生まれれば、それは他チームにない大きな武器となるだろうと思われれます。県内を見ますと、今年には特に強いチームが見られない代りに、多くのチームが同程度の力でひしめき合っているように思われます。このひしめき合うチームの中で、部員三〇名助け合い一丸となつて我が高々が抜け出して行こうという決意しております。部員一同頑張ります。

## 精神の向上を

### 剣 道 部

二年 三木 克之



昨秋からの剣道部の成績を一度振り返って見ると、選手権ではさい先よく優勝

し、その後の新人戦・関東大会県予選・インターハイ県予選は共に惜しくも優勝を逃したものの常にベスト4に入賞するという立派な成績を収めました。これも皆、日頃の練習の成果と思つていきます。練習は何時間もやる訳ではなく、最短時間で最大効果を上げるようにやって来たのが良かったのだと思つていきます。

二年生が引退し今度は一・二年生が中心となって練習をやって行く訳ですが、ここではまず心身の鍛練という事を考えてやって行きたいと思つています。最近のスポーツは、技術だけを重視している傾向があるという事を耳にしますし、実際にもそういう所があると思つています。もちろんスポーツをやる上で、技術の向上も必要な事だし、大切な事だと思つています。しかし、それにも増して心、精神の向上という事もとても大切な事だと思つています。昔から剣道は礼に始まり礼に終る武道だといわれますが、その剣道を先生や先輩の指導のもとに学びながらこれからも練習して行きたいと思つています。そして、試合ではこれまでのような良い成績を上げる事を目標とし、また部員全体が一つにまとまったチームワークのとれた部になるよう頑張つて行きたいと思つています。

# 先輩、今年も頑張ります

## 現役の抱負



次の目標は、学校対抗です。今年は二点・七位で、一部に残留しました。しかし、二点中一・二年の得点は三点と少々頼りない感じもありますが、厳しい冬練習に耐え、来年は大きく伸びて一部残留を確保したいと思います。

我々は、陸上部の雰囲気のようなものも、大切に受け継いで行きたいと思えます。部室の扉などに見られるように、実に個性的でまた和やかな空気などです。今の二年生にとって、初めての共通一次テストも控えて、決して楽な状態ではありません。しかし八〇周年の記念事業で、四〇〇Mトラックやタータンのピットなども出来て、最高の設備です。この恵まれた環境に恥じないように、インターハイ出場、学校対抗一部残留、それに勉強との両立を目指し、頑張っていくと思います。

### 来いノインターハイ

## 陸上部

二年 町田 勲



現在一・二年部員は、短距離二人・跳躍三人・投擲二人・長距離四人で、この

一人を中心にこれからやって行く訳です。

まず第一の目標は、やはり来年のインターハイ出場です。陸上競技の大会の中で最大のものであるし、陸上をやっているからには一番出場したい大会であるからです。高々陸上部は、ほとんど毎年インターハイに選手を送っていますが、来年の見通しは決して明るいものとはいえません。しかし、これからの練習次第で、可能性は幾らでも開けて来るので頑張りたいと思います。

### 今年がチャンス

## バレー部

二年 清水 道之



我々は、現在高々バレー部創立以来最も恵まれた環境の中におります。菊地俊

二先生(五二回・保健体育科)という良き指導者を得、中学時代に全国大会経験者六名・関東大会経験者八名という選手層。それにも増して我々の良き力となつて下さるOB会、そして他の部に見られぬPTA会の充実。こんな環境の中、我々は、勝つて当たり前。我々新チームは、

我々の目標である。全国大会ベスト4入り。き絶対して見せます。

### この願いをプレーに生かせ

## 応援部

二年 金沢 初生



今年の応援部は、近年になく良く活動したと思う。県高校総体のバレー・バスケット部への応援。またインターハイ県予選では、応援したかいあってバスケット部が優勝してくれた。そして、夏の高校野球での応援には熱が入った。連日、猛暑の中の懸命な応援に答えるように、野球部諸君が勝ち進んでくれたので、疲れなど喜びに吹き飛ばされてしまった。惜しくもゾーン決勝で敗れはしたが、心行くまで応援出来たので悔いはない。

これからも応援する機会は沢山ある。その一つ一つに、全力を傾けて応援するのが我々の役目である。ただ応援するという単純な動作を一生懸命することはなかなか出来るように思えるが、そうではない。我々の熱意のこもった一声が意外と味方の選手たちを力付け、それがそのまま勝利につながるのである。単純ながらも、与える影響は大きいのである。我々応援部員は、このことを確信して疑わない。

我々は、これからも、伝統を生かして学校の象徴として高々の名に恥じないよう活動して行く。どんな場所でも、どんな場合でも、選手たちを力付け、安心

### 小さい白球を追って

## 庭球部

二年 原田 佳幸



我々庭球部の目標。  
一、新人戦 (団体) ベスト4  
(個人) 二チーム以上ベスト8

二、関東インドア大会出場  
三、関東大会(団体) 出場 (個人) 四チーム以上出場  
四、インターハイ (団体) 出場 (個人) 三チーム以上出場

試合に勝つための条件の一つでもある「人の和」をしっかりと築き、どこにも負けない団結力を持つチーム、また強いだけでなくマナーもちゃんと守れるチームにしたい。

一人一人が、常に自分自身に打ち勝てる不屈の精神力を持ち、ちよつとした事ではへたばらない体力を造りたい。またボール一つを大事にし、コート愛する心とあの小さい白球に対する集中力を養いたい。

高々らしい試合振り、つまり雰囲気や相手を含み込み普段の力の二・三倍の力を発揮するという伝統を受け継ぎたい。試合に勝つための場はもちろん、人間形成の一つの場として大きな役割を持つような庭球部にしたい。

して試合が出来るようにしてやれる部にしたい。 押忍

少数精鋭で

体操部



二年 大山 俊夫

部員数は、二年・一年を合せて五人。恐らく、高々運動部の中でも一番少ない

ではないでしょうか。五人という数は決して満足出来る数ではありません。後五人は欲しい所なのですが、体操というスポーツが初心者には取っ付きにくい。五人のうち一人は初心者で、中学の時は剣道をやっていたのですが、体操をやりたいと入部して来ました。入るまでは不安があった様ですが、今ではもう一人の一年生の良きライバルです。確かに体操というスポーツは取っ付きにくいですが、一度やり始めるとやめられない不思議な魅力がある様です。

そんな状況の中の成績は、県内で七、八位。六位入賞をと思っているのですが、どうも手が届きません。ちなみに、参加校は八、九校です。

ところで、県内では高崎工業高校が二位を引き離して優勝。更には全国制覇もなし遂げましたが、それは県内の高校の体操部をあとにたてます。県内の争いは激しくなっています。僕たち高々体操部も、その闘いの中に入って行って高工を脅かす位の力を持つ様に練習しておりますが、今位の力では彼らの足下の先端にも及びません。

僕たちは今、「六位入賞」を目指して

また新人戦、更には対前橋高校定期戦では自分自身納得の行く演技が出来る様になりたいと思っています。

打倒！利根商

水泳部



二年 須藤 聡

我々は、最大の目標である県高校総体(学校対抗)優勝を(利根商業高校から奪回すべく、シーズンオフはランニング・筋力トレーニングを積み重ね、まず基礎体力を植え付ける心算である。それに十二月頃から月一、二回の割合で県水泳連盟の合宿があり、それにも出来るだけ参加したい。我々は、十月から水・土曜は群馬スイミングスクールで、約二〇〇mの練習を行い各専門種目にみがきかける心算だ。

来年の我々の目標は、学校対抗優勝はもちろん、関東大会の四〇〇Mリレーで決勝に残ること、全国大会出場などである。

これからのシーズンオフが、水泳にとってかなりのウエイトを占める。我々も一丸となって練習に取り組み、明日の栄冠を勝ち得たい。



翠樹と二つどころ

銀杏並木



上和田の校舎の正門前通りには、両側に太くて丈の高い立派な銀杏並木があった。石田 昇(三八回)

(移植された銀杏は)今では相当の大木になっており上和田の旧中学校舎をしのぶ、唯一の思い出の影をおとしております。市川広太郎(四二回)

校舎の銀杏並木は(上和田の)旧の校舎門前より移植したもので、東京帝大を模したつもりである。中川 英一(一四代校長)

私の造園計画は……南面に広がるグラウンドと森に包まれた校舎の間を東から西へ銀杏の並木道が貫いて、この銀杏並木を特に校庭の特色として欲しいと思う。この並木の景色は希望に満ちた生徒の理想を意味するようにしたいのである。井上房一郎(一五回)



グラウンド拡張のため銀杏並木を3m北へ移植 (S52・2・23)

株式会社 中林精良堂

代表取締役

中 林 勝 利 (五九回)

高崎市本町一四四  
電話〇二七三(二)二九〇三

株式会社 友松喜平商店

代表取締役

友 松 敬 三 (六一回)

高崎市相生町二〇  
電話〇二七二(二)二二五八

須藤接骨院 須藤柔道場

須 藤 忍 (六六回)

高崎市大八木町二二二八  
電話〇二七三(二)五六一四

株式会社 ホウツキヤ

山 崎 和 広 (六八回)

高崎市嘉多町四三  
電話〇二七三(二)二七九〇

翠巒体育会

グラウンド修祓式

十月二日(日)午前九時、翠巒体育会主催によるグラウンド修祓式を新装成ったグラウンドで挙行政致しました。

当日は快晴に恵まれ、同窓会・PTA・学校・運動部OB会等関係者多数の出席のもとに、琴平神社宮司市川清先生(二五回)の司祭により、グラウンド使用の安全と運動部の活躍を祈願して、次の順序で玉串奉奠が行われました。

〈来賓〉  
原 一雄氏 (二九回)  
同窓会副会長

安藤 直典氏 (四五回)  
PTA会長



グラウンド修祓式 (S52・10・2)

中野 敏宗校長  
井上房一郎氏 (一五回)  
清水 貞保先生 (三〇回)  
岡田 由重先生

〈翠巒体育会〉

- 会長 国峯善次郎 (五〇回)
- 副会長 勝俣 真 (五二回)
- 副会長 友松 敏三 (六一回)
- 陸上部 大田部 保 (五二回)
- 体操部 森田 忠義 (五九回)
- 卓球部 深沢 昇 (五七回)
- 庭球部 勝俣 真
- バスケット部 反町 定夫 (五〇回)
- バレー部 片野 恒 (四九回)
- ラグビー部 住谷 克彦 (四九回)
- サッカー部 国峯善次郎
- 水泳部 小此木 勝 (五六回)
- 柔道部 桜井 弘 (五六回)
- 剣道部 笠井 孝親 (五五回)
- 山岳部 酒井 征哉 (六二回)
- 野球部 中川 保 (五二回)
- 応援部 下田 茂夫 (五〇回)

式典後、庭球部・サッカー部の親善試合が行われましたが、各部OB対抗ソフトボールは都合により中止となりました。お集りの皆さんに重ねてお呼び申し上げます。

(事務局)

編集後記

「翠巒体育」第四号、大変遅れて申し訳ありませんでした。心からおわび致します。皆さんの御協力により立派な第四号が出来た事を、皆さんと共に喜びたいと思います。ただ残念な事は、いつもながら、OB会便りが少ない事です。次号からは各OB会にどしどし注文を付け、内容を更に充実したいと思えます。

それにしても、がり版刷でもいいから機関紙を造ろうとの意気込みから生れた「翠巒体育」もこの様な形に成り、うれしく思っております。その創刊の時に始まった副編集部長佐藤義夫君(五八回)の縁談が、立派なパパさん姿に変わった月の早さに驚いています。

本号は、同窓会長小山長四郎さんにお忙しい所を寄稿していただき感謝申し上げます。東京からも同窓会副会長入沢武右門さんの貴重な原稿が到着、楽しく編集させて頂きました。また、鳥の瀬のにぎやかな倉洲の里へ浜名一雄さんを訪れて特別寄稿をお願いしました時、さすがは県体協会長、歓談の中に若々しさがあふれる姿、若い我々に大いに元気づけをして下さり有難うございました。

母校も様相を一段と整え、創立八〇周年の記念行事を迎えようとしています。生徒諸君は素晴らしい教育を身に付けて、やがて広い社会にはばたいて行くでしょう。そして百年事業の時は四〇才近くなら、社会の中堅として活躍していると思

います。その際には、更に意義ある記念事業のために協力してくれる事と信じます。新しく植えられた木々も、丁度見頃になっているでしょう。中野敏宗校長も元気な姿で来校されると思いますが、その緑の下で声高らかに「翠巒」を歌おうではありませんか。

サッカー部OB会に触れて恐縮ですが東京オリンピック後に増加した若いOB諸君のおめでたが頻繁で、祝電を打つやら、熱い挨拶状が送られて来たり、頬の筋肉が緩み放しです。これも、サッカー部のみならず、OB会共通の話題でもあると思えます。厳しい政治社会の現況の中で、運動部OB会の集いの話題は、じめじめしたものが出てくる程です。これも若い命の洗濯が出来ない程です。これも若い時から、何の報酬も求めず、自己の力の限界を求めて汗を流した男の歴史がそうさせているのかも知れません。この「翠巒体育」で、これらの様子を伝えたい、記録として残したいと思えます。

(国峯善次郎)

翠巒体育 第四号

昭和五十二年十二月二十九日発行

翠巒体育会事務局

高崎市八千代町二一四一(二三七〇)

群馬県立高崎高等学校内

電話 〇二七三(四〇〇七四)代  
印刷 荒瀬印刷株式会社